

〈解題〉

『ばしんめいざんのき盆石皿山記』は、前編が文化三年、後編が文化四年に江戸書肆・住吉屋政五郎より刊行されたもので、馬琴の中本型読本中では最も大部の作品である。構想も他の作品に比べて複雑になつて居り、趣向も凝らされている。まとまつた作品論は未だ備つていないが、従来「伝説物」と分類され、題材として皿屋敷伝説・鉢かつぎ伝説・刈萱桑門伝説が指摘されている。

自叙には『古今和歌集』巻第二十の「美作や久米の佐良山さらさらにわが名は立てじ万世までに」(二〇八三番歌)に見られる古歌を踏えた借辞が見られるが(『古今六帖』二や『太平記』四などにも引かれている)、美作国の久米更山という場所は「皿」から得た着想であると思われる。錦織、佐用丸等という登場人物名は付近の地名に拠つたものである。

又、「盆石」という標題にも関連する〈継子譚〉が色濃く採入れられている。「紅皿欠皿」(話型としては「米福栗福」よりも寧ろ「皿々山」と呼ばれる話を利用している。殿様が盆皿を見せて歌を詠ませ、実子に比べて上手な継子の方を城へ連れて行くという話柄である。『日本昔話事典』(弘文堂、一九七七)では「歌の功德」という項目で〈歌徳説話〉として解説されている。

一方、『日本昔話大成』巻五本格昔話四(角川書店、一九七三)には「十継子譚」に詳しい記述があるが、「娘と田螺」「継子の椎拾い」や「継子と井戸」と呼ばれる話型もある。さらに「鉢かつぎ」も継子譚に属する話型である。

馬琴がどの様な資料に拠つたかは詳にできないが、昔話や民譚などから、此等の継子譚を集めて趣向を凝らしたものと考えられる。

一方、「皿」「井戸」に関連のある伝承として「皿屋敷伝承」を採入れた。『播州皿屋敷』として人口に膾炙した話を踏まえながらも、伴蒿蹊『閑田耕筆』(享和元 巻二に所収の話を利用した様である。

○上野國の士人の家に秘蔵の皿二十枚有しもし是を破ワルものあらバ一命を取べしと世々いひ傳ふ然るに一婢ヒあやまちて一枚を破りしかハ全家みなおとろき悲しむを裏に米を舂ウスツク男これを聞つけてわか家に秘薬ありて破たる陶器スエギを繼ぐに跡も見えず 先其皿を見せ給へといふ皆色ミシを直して其男を呼てみせしに二十枚をかさねてつくぐみるふりしてもちたる杵キネにて微塵ミシに碎たり人々これはいかにとあきれたれば笑ひていふ一枚破たるも二十枚破たるも同じく一命をめさるゝなれハ皆わが破たりと主人に仰られよ此皿陶物なれハ一々破るゝ期有へし然らハ二十人の命にかゝるを我一人の命をもてつくのふべし 継べき秘薬有といひしハ偽にてかくせんがため也と一寸もたじろかず主人の帰りをまちたるに主人帰りて此子細を聞き其義勇を甚感し城主へまうして士に取たてられたりしがはたして廉吏成しとかや

場所や、二十枚の皿という設定は異なるものの、その他のプロットは、ほぼこれを利用している。

源七が通世する場面や、結末の父子再会の場面は『苺萱桑門筑紫幃』を踏まえたものと思われる。文化四年には『刈萱後伝玉櫛笥』（中本型読本）を刊行して居り、他作でも苺萱伝承を頻繁に利用している。それだけ関心の深いモチーフであったと思われる。

さらに、広岡兵衛が深夜、山神廟に出没する異形のを退治する段は、浅井了意『伽婢子』（寛文六）巻十一の一「隠里」に似た話があり、あるいは参照していたかもしれない。

結末で、寂霊和尚の済度により、紅皿の怨魂の仮に現じていた姿が消えてしまう段は、後編執筆直前の文化二年十二月刊行された京伝の読本『桜姫全伝曙草紙』の一駒を想起させる。なお、この「寂霊和尚」と「永沢寺」建立の話、「誕生寺の棕」「宇那堤森」「塩垂山」等は、以下の通り『和漢三才図会』に見えている。（句点を補った）

丹羽

永澤寺

後小松院勅願 開山 道幻寂霊和尚

○禪師名寂霊號通幻洛陽人。禱清水寺觀音有妊將產母遽亡。瘞于古廟之側。行人往來輒聞廟側有兒聲。父亦聞之開墳視之已誕生矣。父且喜且愕。懷歸祖母育之。甫二歲父喪。入台山。性英敏。凡内外經史一經其目無不通曉。一歲剃髮慕禪門。乃能登摠持寺參義山碩和尚。後和尚以古人公案節角諸訛處一一詰問。師應答如流。逮和尚滅後。檀越細川氏欽師玄化創寺。曰永澤寺。以師爲開山。每往來摠持寺。越前守乃於中路立龍泉寺爲師駐錫之所。應安年中勅爲天下僧錄。明徳二年五月五日寂年七十。

美作

誕生寺 在久米郡稻岡庄枋社村

崇徳帝之朝 長承二年四月七日源空誕生。其舍之西有棕樹。二杈大木也。白幡二旒降翻其梢枝。有異香。俗呼其木曰誕生棕。以爲念珠。後其地建寺號誕生寺。源空四十三歲在洛東大谷吉水自作三尺影像。熊谷入道蓮生持下安當寺。源空傳詳智寺領五十石。

久米更山 在二宮村近處 有小川名久米川

何花 美作や久米の更山さら／＼に我名ハ立し万代迄に 源

宇那堤森 在久米更山近處

思はぬを思ふといは、真鳥すむうなての森の神もはつかし

勝間田御湯

此山の道の限と思へともかつまたのみゆ遠く成けり

鹽垂山 在津山坤小山也

和漢の鹿の怪異については、『続搜神記』巻九「鹿女脯」

淮南陳氏、於田中種豆、忽見二女子、姿色甚美、著紫纈襦、青裙、天雨而衣不濕、其壁先掛一銅鏡、鏡中見二鹿、遂以刀斷獲之、以為脯。

また『前太平記』卷第一「經基射鹿給事」

……大きな鹿、築山の陰より躍り出で、散り敷く紅葉に戯れしは、猿丸太夫の詠じけん、歌の余情も斯くやらん、小倉山の風景を、今茲に移し出だせる眺望かと、御遊の興を添へられしが、始めの程とそあれ、珍しくも面白き事に思い給ひしが、次第に何となく恐ろしく、又何くより来たるべき道もなきに、けしからぬ様にして駆け出でたれば、主上は幼き御心に、絵に描けるより外は、終に御覽ぜられし事も無ければ、「あな恐ろし。如何なるものぞ」とて、をびへさせ給へば、「人や候あれ追ひ出だして進らせよ」と声々に呼ばり給へども、所は后町の北なれば、外衛の諸士は一人も候はず。鹿は猛つて駆け騰がり、まぢかく玉体に飛び懸かり進らせんとす。若殿上人達周章騒ひで、我もくと太刀を抜き、切り払ひ給へば、剣にや畏れけん、南の庇に飛び揚がり、常寧殿の棟に皇居を脱んで居たりける。夫鳳闕の十二門、皆交戟衛伍を守り、長に非常を誡むるとなれば、天をも翔るか地をも潜らずば、争でか爰に入ることを得ん。古今未曾有の珍事なりと、諸卿驚き合はれしに、摂政忠平公宣ひけるは、「目に見へぬ物の障礙せば奇しとも謂ふべきか。鹿は足有れば、何処にか至りぬべし。恠しとするに足らず。射芸に達したらん者に仰せて射させ候はん。誰か候」と召されしに、經基王御在しければ、つつと参り給ふ。摂政、「云々のことあり。射留どめ申されんや」と仰せられければ、一議にも及ばず領掌ありて、則ち弓と矢執り寄せて件の所に至り、彼の鹿の有り様を伺ひ見給ふに、何様にも尋常ならず、上下の牙生い違ふて、口は耳の根まで裂け、水晶の面に血を洒ぎたる如き眼にて、四方を見廻し、隙あらば御殿の中に飛び入りぬべき気色なり。「さればこそ曲者なれ。若し我が形を見はバ逃げもやせん。射損じたらんに於いては、当坐の恥辱のみにあらず、末代までの瑕瑾なり」と、貞観殿の御階の下に居隠れて、弦くひ湿し、流鏑矢打ち番ひ、彼鹿の有所能々見澄まして、暫く堅めてひやうと発つ。其矢少しも矢坪を違はず、左の草分より右の耳の根まで、鏃白く射出だしたれば、争でか暫しも怵ふべき、真倒さまに転び落つ。摂政殿下を始めとし、三公九卿諸家の武士、内侍命婦の官女まで、「あゝ射たりく」と云ふ声に、御殿も揺るぐ計りなり。其後件の鹿を、淀の川瀬に柴漬にぞしたりける。則ち齋部卜部の両家に仰せて、様々の御祓有りて、濁穢を清め給ひける。……

などを参照したものと思われる。

また、鸚鵡が奸夫淫婦の悪事を主人に知らせるという趣向は、後年になつて合巻『鳥籠山鸚鵡助剣』(文化九)でも使用している。この話柄は和刻本『開元天寶遺事』(寛永十六)に見えている。

鸚鵡告事

長安城中^ニ有^ル豪民楊崇義^{ト云}家富^ム數世^{ナリ}眼玩^ノ之属^{タリ}僭^ス於王公^ニ崇義^カ妻劉氏有^ル國色^ニ與^ニ隣舍^ノ兒李弇^イ私通^{シテ}情甚^シ於夫^ニ遂^ニ有^レ意^レ欲^レ害^ス崇義^ヲ忽一日醉^テ眠^ル於室中^ニ劉氏與^ニ李

傘同ク謀テ而害レ之埋_下於枯井ノ中其ノ時僕妾ノ輩并ニ無_レ所_レ覺_レ惟有_二鸚鵡一雙_一在_二堂前_一架_上泊_二殺_一崇義_一之後其妻却_レ令_二童僕_一四散_二尋覓_一其ノ夫_一遂_二往_一府陳詞言_二其_一夫不_レ皈竊_二慮_一爲_二人_一所_レ害府縣ノ官吏日夜_二捕_一賊_二涉_一疑_二之人_一及_二童僕_一輩經_二擗_一捶_二百數人莫_レ究_二其_一弊_一後來縣官等再_二詣_一崇義_一家_二檢_一校_二其_一架上_二鸚鵡_一忽然_二聲出_一縣官遂_二取_一於_二鸞_一上_二因_一問_二其_一故_一鸚鵡_二曰_一殺_二家主_一者劉氏李弇_一也官吏等遂_二執_一縛_二劉氏_一及_二捕_一李弇_二下_一獄_二備_一招_二情_一欵府ノ尹具_二事_一案_二奏聞_一明皇歎_二訝_一久_二之_一其ノ劉氏李弇依_レ刑_ニ處_一死_二封_一鸚鵡_二爲_一綠衣使者_一付_二後宮_一養_二餵_一張説後_二爲_一綠衣侍者_一傳_二好_一事者_一傳_レ之

この他にも様々な出典があると思われるが、中本型説本としては比較的良くまとまったテキストである。本作に用いられた趣向は後に、文化十一年刊の合巻『皿屋敷浮名染着』や、文化十二年刊の読本『皿々郷談』でも利用されているのである。蛇足ながら、缺皿が皿を割る説明に「名詮自稱」という語が用いられて居り、比較的早い用例として注意が惹かれる。

なお、前編見返しに記された「鵲飛山月曉 蟬噪野風秋」の二句は、『全唐詩話』（四〇卷二冊）に見える「上官儀『入朝洛堤步月』／脈脈廣川流 驅馬歷長洲 鵲飛山月曉 蟬噪野風秋」（朝に入らんとして洛堤月に歩む）／脈脈として廣川流れ 馬を驅りて長洲を歴 鵲は飛ぶ山月曉 蟬は噪ぐ野風の秋に）に拠る。『大唐新語』文章第十八には「高宗貞觀の後を承け、天下事無く、上官儀独り宰相と爲る。嘗て凌晨入朝し、洛水の堤に循ひて歩み轡を徐ろにし、詩を詠じて曰はく、脈脈として廣川流る 馬を驅りて長洲を歴 鵲飛びて山月曙け 蟬噪ぎて野風秋なり 群公之を望むこと神仙の如し焉。」とある。この句は馬琴が気に入っていたと見え、『南総里見八犬伝』肇輯の自序に「八犬士傳序〔蟬_{噪野風秋}〕」と、蟬の絵中に第三句を意匠化して使用している。

〈書誌〉

前編 二卷二冊（底本は合一冊） 十八・九糎×十三・四糎

表紙 貴重色無地

題籤 左肩 枯葉色地墨刷の破片のみで外題は不明

見返し 白地墨刷 四周双辺 月下岩山の意匠 中央に「盆石皿山記」、右肩に「曲亭馬琴作／

一柳齊豊広画」、左下に「前編二冊／鳳來堂梓」その上に「鵲飛山月曉／蟬噪野風秋」

序題 「盆石皿山記自叙」（文化ひのえ寅のとし正月）

目録題 なし

内題 「盆石皿山記前編上（下）」

柱刻 なし（丁付はノド）

尾題 「盆石皿山記前編上（下）果」

匡郭 十六・二糎×十・九糎

丁付 上巻 自叙二丁（序一オ）序二ウ） 目録半丁（序三オ） 口絵半丁（序三ウ）

本文二十五丁（上二オ）下二十五終ウ） 計二十八丁

下巻 本文二十一丁（下二オ〜下二十二ウ） 跋二丁（跋一オ〜跋二大尾ウ）

刊記 半丁（後ろ表紙見返し） 計二十三丁

行数 叙八行 本文九行 跋八行

刊記 文化二年乙丑夏五月著述

同三年丙寅春正月発行

江戸四谷伝馬町二丁目

住吉屋政五郎梓

印記 なし

その他 国会本には、上巻六丁と七丁の間に封じ紙が残っているので初板初摺本と見做して良い。

後編 二巻二冊（底本は合二冊） 十九糎×十三・三糎

表紙 浅標色無地に紗綾形龍紋の型押し（改装されているかもしれない）

題簽 左肩（原題簽なし、大惣の書題簽あり）

見返し 白地鶺鴒茶刷 朝顔をあしらった飾枠。中央に「盆石皿山記後編」、右側に「曲亭馬琴戯

作 今刊二冊」、左側に「一柳齊豊広画 鳳来堂梓」

序題 「刊皿山記後編叙／文化柔兆撰提格麦秋上浣／飯岱 曲亭馬琴重叙／「馬琴」「」」

目録題 なし

内題 「盆石皿山記後編上（下）」

柱刻 「皿山後編上（下） 丁付」

尾題 「盆石皿山記後編上果」 「盆石皿山記後編大尾」

匡郭 十五・九糎×十一・一糎

丁付 上巻 叙一丁半（二オ〜二ウ） 目録（二ウ） 口絵二丁半（三オ〜五オ）

〔再識〕半丁（五ウ） 本文（六オ〜三十一ウ） 計三十二丁

下巻 本文三十一丁（二オ〜三十二ウ） 跋一丁半（三十二オ〜三十三オ）

刊記 半丁（三十三ウ） 計三十三丁

行数 叙七行 本文九行 跋八行

刊記 文化三丙寅年皐月上浣著述

同四丁卯年春正月吉日発販

江戸書肆 通油町

鶴屋喜右衛門

四谷伝馬町二丁目 住吉屋政五郎梓

印記 上巻は一オと三十一ウ、下巻は一オと三十三ウに大惣の印記あり。

その他 架蔵本は表紙欠の汚本故、この書誌は国会本に拠る。国会本上巻七丁と八丁の間に封じ紙を破去した跡が見られる。

諸本 半紙本仕立の後摺本が二種類ある。一方は四冊で、分冊方法は中本仕立のものと同じであるが、後編七ウ八オの挿絵（佐用丸を包んだ鹿皮が飛ぶ図）以外の薄墨は省かれてい

る。他方は八冊に分冊したもので、内題を「絵本皿山奇談」とし「大坂書肆 心斎橋／北久宝寺町 相原屋義兵衛」という刊記を持つ。薄墨は全て省略されている。更に後、明治期に三木佐助が求板後摺したものもある。

〈凡例〉

- 一、^{PDF}版は可能な限り板本の表記に近付けた。^{HTML}版では検索の便を考慮し、異体字等は近似の字体に置き換えた。
- 二、片仮名は、助詞の「ハ」を除いて、特に片仮名の意識をもつて書かれていると思われるもの以外は平仮名に直した。
- 三、表記上の誤りと思われる箇所は訂正せず「ママ」と傍記した。但し、脱字と思われるものは私意に抛り「」内に補い、衍字と思われるものも「」に入れて示した。
- 四、各丁に「」印を付し、その裏に「」のごとく丁付を示した。
- 五、見返し・口絵・挿絵は全て図版を掲載した。
- 六、底本として、前編は国立国会図書館所蔵の早印本（二〇八一・一六二）に抛り、後編は比較的早印だと思われる架蔵本を使用した。だが、架蔵本は表紙欠で落書の多い汚本故、図版は国会図書館本を使用させていただいた。記して深く感謝致します。

盆石皿山記前篇

【表紙】



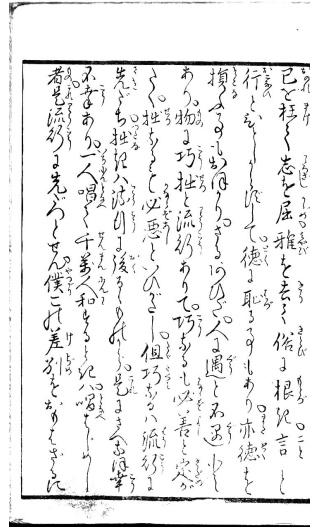
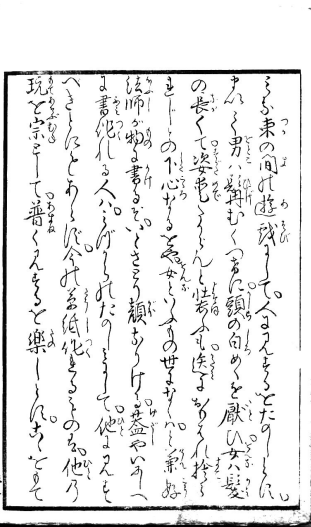
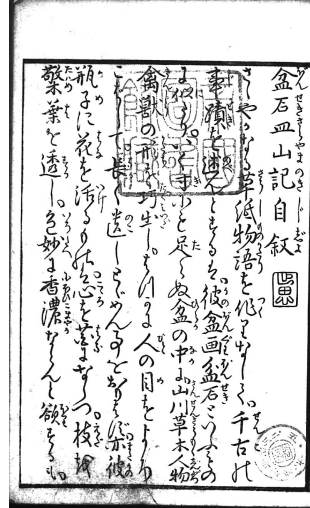
【見返し】

曲亭馬琴作
一柳齋豐廣畫

盆石皿山記

鵲飛山月暁
蟬噪野風秋

前篇二冊
鳳來堂梓



【自叙】

盆石皿山記自叙
出思

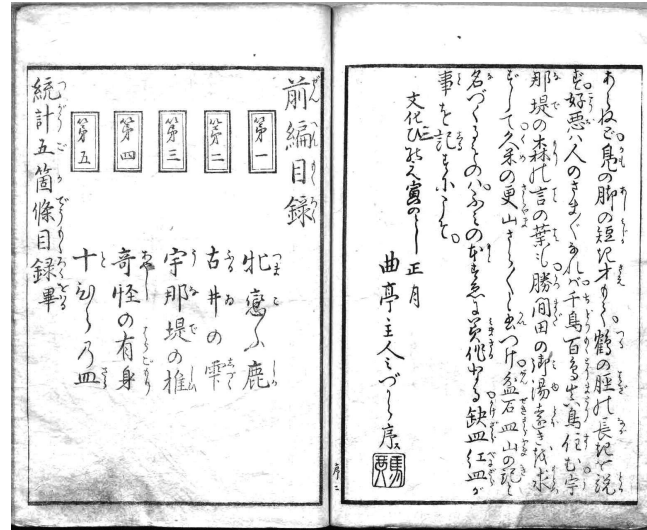
さゝやかなる草紙物語を作りなして、千古の事蹟を述んとするは、彼盆画盆石といふものに似たり、いく寸にも足らぬ盆の中に、山川草木人物禽獸の形を巧出し、はつかに人の目をよろこばして、長く遺しとゞめん事をおもはず、亦彼瓶子に花を活るものは、心を華になしつ、枝を繁葉を透し、色妙に香濃ならんと欲するも、みな束の間の遊戲にして、人に見するをたのしとす、まいて男ハ髯むくつけに、頭の白めくを厭ひ、女ハ髪長の長くて、姿愛たからんと装ふも、迭におもはれ捨られじとの下心なるをや、女といふもの世になくハ、と兼好法師が物に書るぞ、いとさとり顔なりける、蓋やいにしへに書作れる人ハ、みづからのたのしみにして、他に見すべきにもあらず、今の草紙作れるものは、他の玩を宗として、普く見するを樂しとす、こゝをもて「己」を枉て、志を屈、雅を去て俗に根ぎ、言と行とひとしからずして、徳に耻る事もあり、亦徳を損

ふ事もおほかり、さるあひだ、人に遇と不遇とあり、物に巧拙と流行ありて、巧なるも 必善と定
 がたく、拙なるも 必悪といひがたし、但巧なるハ流行に先だち、拙きハ流行に後るゝものから、
 是にさへなほ不幸あり、一人唱て千萬人和するときハ、唱はじめし者、是流行に先だつとせん、
 僕この差別をおもはざるに」あらねど、梟の脚の短き才もて、鶴の脛の長きを説ず、好悪ハ人の
 さまぐなれば、千鳥百鳥真鳥住む、宇那堤の森の言の葉も、勝間田の御湯遠きを求ずして、久米
 の更山さらくと書つけ、盆石皿山の記と名づくるものハ、ふみの本すゑに美作なる、缺皿紅皿が
 事を記すにこそ。

文化ひのえ寅のとし正月

曲亭主人みづから序ス

「鵜」 序二



前編目録

- 第一 牝戀ふ鹿
 - 第二 古井の雫
 - 第三 宇那堤の椎
 - 第四 奇怪の有身
 - 第五 十切の皿
- 統計五箇條目録 畢

【口絵】



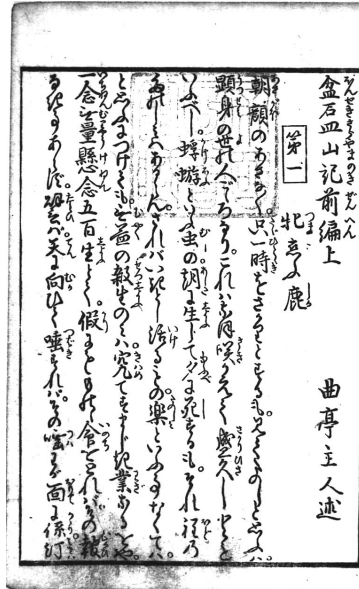
缺皿

客皿の十人前や白牡丹

蓑笠隠居

琴馬

序三



曲亭主人述

【本文】

盆石皿山記前編上

曲亭主人述

第一 牝恋ふ鹿

朝顔のあさなく。只一時をさかりとするも。見てたのしと思ふハ。頭身の世の人ごゝろなり。これハ
 なほ咲かえて盛久しともいふべし。蜉蝣といふ虫の。朝に生じて夕に死するも。それ程のたのしみハ
 あるらん。されバいきとし活るもの。樂といふ事なくてハ。と思ふにつけても。無益の殺生のみハ。究
 てすまじき業なるをや。一念無量懸念五百生とて。假にもものゝ命をとれば。その報なき事あらず。
 譬バ。天に向ひて唾すれば。その唾わが面に係。汀に立て水を打バ。その水わが衣を湿す。心なきも
 のすら。すべてかくのごとし。況生あるものに對し。善惡の報なき事を得ず。こゝに美作國久米
 の更山の片ほとりに。木村源七といふものありけり。原ハ雲州富田の城主鹽治駿河守師高の家臣

也。主君師高ハ。去める應永元年。山名滿幸が謀反に与し。亶敗れて終に自殺し給ひければ。源七も敵陣に走り入り。討死せばやと覚期せしが。ふたゝび思ひめぐらせバ。目ざすにあまる大軍に。われ只一騎駆むかひ。よしや敵一人二人を討とりて死するとも。九牛が一毛にて。主君の仇を報ふにもあらず。こゝ上¹にて犬死せんよりハ。命全うして亡君の後世をも吊進らせ。世の形勢をも見つべしと深念し。わが姉の子に。三重之介とて。今慈七才なるが。近曾孤となりければ。家に養ひおきたりしを伴ひ扶て。やうやく一方の圍を切ぬけ。些のしるべあれば。美作國をこゝろざして落行折しも。乱軍の中にて甥の三重之介を見うしなひしかバ。世ハはやかうと浅ましく。死おくれたる身を悔み。夢路をたどる心持して。われのみいなば美作や。久米の更山にぞ着にける。しかるにこの山の麓なる。獯人長助といふものハ。源七が乳母の夫にて。由縁あるものなれば。これを「便りてその家に尋ゆき。主家の滅亡。わが身。甥の三重之介が事まで。備細に物がたれば。乳母ハさらなり。長助も信あるものなれば。ふかく憐み。いつまでもこなたにおはせとて。世にたのもしく款待にぞ。源七もその志の浅からざるを感悦し。且く足を駐しほどに。なす事もなくて。貧き家に養るゝを心うく思ひ。一日長助とゝもに山にわけ入り。一ツの鹿を射てとりしに。いとおもしろき事におぼえしかバ。これよりして只管殺生に心を委ね。其許ハ年老たり。われかはりて活業をせん。心安く思ひ給へなどいひこしらへ。其後ハわれのみ日毎に」上² 狩くらすに。弓ハ元來その家に生れて。百發百中の手煉あり。年紀ハ廿五才にて。筋骨も健なれば。年來その技に馴たる長助よりも。獲ハ却て多かりける。さて又長助ハ。晩稻と名づけし女兒只ひとりをもちて。今茲十八才也。かゝる田舎に生育といへども。容貌も醜からず。開らきかゝれるはつ花の。匂ひそめにし時なれば。源七が男態の艶なるに。いつとなくこゝろありげなるを。父母はやく見てとりて。素姓といひ古主といひ。彼人を婿とせバ。千々の黄金を得しよりも。女兒が僥倖ならんとて。源七と晩稻がさし向ひ居るときハ。わざと「その坐を外せしも。子ゆゑに甘き親」こゝろ。すいを通すと娛くて。晩稻ハ思ふ心のうち。わりなく口説より糸の。結べる縁にし夜をかさね。日をかさねつゝ妾とも。妻ともつかでその年も。程なく暮て立かへる。春も弥生のころなりけん。長助夫婦俄頃に病て。終にむなしくなりにけり。その齡ハ六十を超て。思ひ残す事ハなけれど。いつとても親子の別れ。かなしみ歎もことわりなるに。ましてや只一日のうちに。二親を喪ひし。晩稻が身の便なき。ちからとするハ源七様。あなた一人と

かこつにぞ。源七も長助夫婦が。一旦の恩儀をおもひ。縦このまゝ朽果る」上³とも。見すつる所存さ
らになし。心づよくおはせよ。といひ慰めてなき人の。跡懇に吊ひぬ。こゝに又更山の近在。二宮
といふ村に。錦織郡司といふ老人あり。そのいにしへハ時めきて。何不足なき身上なりしが。いか
なる過かありけん國守の御氣色を蒙り。所帯を過半没収せられしかバ。残る田畑をも人に領て耕さ
せ。わが身ハ久しく閑居して。物の卒を枕の友とし。哥を詠じて思ひを述。世を風流にくらせども。
妻ハ先だつてなき人の員に入り。子といふものもなかりし程に。とかく老人の介抱ハ。女子にます
ものあらじとて。落穂といふ妾一人をもてりける。」されど郡司ハ齡七十を超たれば。あへて色
を好にもあらず。只肩を打せ腰を捺らせ。さながら看病人に異ならず。この時落穂ハ。としもいまだ
二十を過ず。姿も又匂やかにて。こゝろ利たる女子なれど。不幸にしてはやく父母に後れしを。叔父
の弁四郎といふもの。居多の給銀を貪りて。近曾妾奉行に出しけるとぞ。しかるに彼獨人長助ハ。
郡司がむかし時めき榮し頃。久しく仕たる家隸にてありしかバ。常に訪ひおとづれし程に。郡司も

その老実なるを愛し。をり／＼衣服な

どとらせしが。長助世を去て後も。源七
たえず出入りて。」上⁴昔にかはらず敬ひ
冊きけるを。落穂ハ見るたびに心とき
めき。目元に思ひをかよはせても。源
七元より物がたき男なれば。馴々しく
詞もかけず。郡司も落穂が素態を猜し
ながら。わかきものゝ他心。たれも一た
びハかくぞあらめ。老たるわれに仕れ
バ。妾といふも名のみにて。彼が男ほ
しげなるも憎からず。されど源七ハ究
て心正しきのなればとて。聊も疑
ず。頃しも秋の半なるに。郡司が宅地ハ
久米川を前に堰入れ。塩垂山宇那堤の



森も遠からで。庭いと廣ければ。草の花いろ／＼に咲みだれ。楓も色づきて。野山の錦も外ならず。夜に入」〈挿絵第一図〉^上」⁵」れば塩垂山の鹿。めづらしくかよひ來て。牝恋ふ声も妙也けり。あるじハかねて敷嶋の道に心をよすれば。これをゆふべの友として。暮るゝを遅しと待わびしに。十日ばかりのち。彼廉一タ來ることなし。こハいかにしつる。とその夜ハ本意なく明せしに。忽地源七訪ひ來しかバ。郡司この事をいひ出で。年來わが庭へ廉の來て鳴こともなかりけるに。この秋ハめづらかに。軒端ちかく鳴を聞バ。尋常の廉にかはりて。声も又妙なるをもて。ふかくこゝろに愛せしが。夢野の廉の夢にだも。疇昔のみその音を聞ず。いと不審こと也と語るに。源七横手を^上」⁶」丁と拍。その物がたりにつきて。思ひあはすることこそあれ。昨夜こゝよりハ四五町あなたの野ずゑにて。一頭の牝廉を射とめたり。その形體の大きありて。尾ハながく。毛いろ蒼くして玄を帶。これハ靈の牝なるべしといへバ。郡司大に驚きていふやう。格物論に。廉ハ一千年にしてその毛蒼く。又百年にして白鹿となり。又五百年にして玄廉となる。靈ハその角一ツありて。尾ハ牛に似たりといへり。疇昔御身が射とりしハ。千餘年を経たる靈なり。嘗古老の物語に。塩垂山に牝牡二頭の靈あり。神通を得てかる／＼しく人の眼にかゝらずと」聞つるが。わが庭に來て鳴しハ。その牡なるべきに。牝廉の殺されたるによりて。疇昔ハ來らずとおぼゆる也。さて／＼いとをしきことかな。と悔歎くにぞ。源七も打おどろきて。何となく毛髪いよだちぬ。郡司ハ只顧彼廉を憐みて。是よりこゝち惱しく。元氣やうやく衰へて。既に危く見えければ。源七も日毎に來りて病を訪ふに。郡司おもき枕を揚。わが老病今ハたのみすくなくて。けふを限りと思ふなり。われ日來。御身が信あるをしるが故に。今般の一言を遺して。たのむべき事あり。聞とゞけ給はるべきや。といふに」^上」⁷」源七聞て。何がさて長助世にありし時より。ふかく底を蒙り候へバ。かゝる折にこそ。御大事をも承^上」⁸」はるべけれ。とく／＼仰候へかし。と申せしかバ。郡司いとうれしげにて。たのみたきハ落穂が事也。彼ハ年わかけれど心も利。われに仕て信しければ。病といへども不自由ならず。快く往生する事。彼女子あるによれり。しかればわが身なからん後。その望をかなへてとらせんと思ふ也。その故ハ。落穂過つる頃より。御身を懸相して。思ひを運ぶ事久し。あはれ今より後。御身彼を妻とも妾とも見給ひてよ。しからバわが貯禄。悉く御身に進らすべしと。いふもいと苦しげ也。落穂ハ枕のほとりにありて。この事を聞も果」さず。顔うちあからめて。次の間へ走り入りぬ。源七つらく／＼件の遺言を聞て眉を顰。仰を悻にハあらねど。そ

れがしにハ晩稲おしねといふ妻つまもあり。殊ことさらこの世帯せたいを属つて。彼女かのをなご子を嫁よめらせ給はゞ。身み元正もとただしき増むこがね
ハいくらもあるべし。と辞退ちたいするを。郡司ぐんじ聞て。いやとよ。男女なんによの情じやうハ貧福ひんふくにもかゝはらず。只思をしふ男
に齋さい眉まゆを。身の幸さいはひとするものぞ。彼かれがこゝろハ富とめる家の妻つまとならんより。御身おみが妾めかけとなり果はてん事を
ねがふとハ。われよく見ぬいたり。かならず辞退ちたいし給ふなといふに。源七げんしちも當惑たうわくし。かくまで仰
候おほせへバ。まづ妻つまにもいひ聞きかせ。かさねて否いなやの返事へんじいたし候はん。といひ訖をはりて家いへにかへり。晩稲おしねに
如し上上。此か如じの事ことあり。いかゞ思おもひ給ふと問とふ。晩稲おしねハ天性てんせい賢かしこき女をにて。いさゝかも嫉妬しつとの心なく。し
ばし沈吟しんげんしていふやう。御身おみハわが夫をとなれども。元もとは母はの主君しゆくん也。又また郡司ぐんじどのハ父ちちの古主こしゆなり。恩義おんぎ
をもつていふときハ。何いづれを輕かろしともしがたし。しかるに父ちちが古主こしゆの遺言ゆいげんによりて。御身おみその遺迹いせきを
稟うけつぎ。郡司ぐんじとなりて里人さとびとに敬うやまれ給はん事こと。歡よろこびこれにます事あらじ。世にある人ハ。側室そばめて妾めかけとて。
かずくゝの女をくるひするも男をとこの生平せいへい也。はやく返事へんじして郡司ぐんじ様の心をも安め。落穂おちぼどのゝ望のぞもかな
へ給へかし。と強あながちにすゝめけるにぞ。源七げんしちもこの上うへとて。次つぎの日ひ郡司ぐんじか許もとに至いたり。晩稲おしねが志せつの切
をかたりて。承知せうちのよしを返事へんじすれバ。郡司ぐんじ大きに「よろこびて。誠に御身おみが女房にやうぼうハ。世にも稀まれなる
賢女けんぢよ也。落穂おちぼも彼婦かのをんなが志こころざしにあやかりて。よく操みさほをつくし。家内かないむつましくせよといひ訖をはり。程ほどなく
息いきハ絶たえにける。

第二 古井ふるゐの掬しづく

木村源七きむらハ。思おもひかけず錦織郡司にしきぐんじが遺跡いせき相續さうぞくし。忌いみども果はてて後のち。落穂おちぼを傍妻そばめとして。彼かれが叔父おぢの弁四べん
郎らうをも呼よむかへ。内外ないがいの事をまかせしに。弁四郎べんしやうハ元來げんらい心こころよからぬものなれバ。この世帯せたいハみな
わが姪めひの賜也たまひと恩おんに被きせ。主しゆを主しゆとも思はずして。只酒たださけを飲のみよからぬ技わざのみしたりけれバ。落穂おちぼ
これをきのどくに思おもひ。をりくゝ上上。異見みけんしてたしなめ懲こらしぬ。夫國それくにに二人ふたりの王わうなく。家いへに二人ふたり
の妻つまなしとハいへど。本妻ほんさい晩稲おしねが妬ねたみ。ろあらざるによりて。妻つまと妾めかけとの間あひだむつましく。さなが
ら姉妹あねいもとのごとくなれバ。源七げんしちもふかくよろこび。いづれに親したみ。いづれを疎うとむといふ事なく。月と
暮くらし花とあかせし程ほどに。妻つまも妾めかけもおなじ月つきより身みごもりて。おなじ日に安産あんさんせしが。生うまれし子こハ
二人ふたりながら女をんなにて。晩稲おしねが生うみ。卒妻そさいの子こなれバとて。姉あねと定さだめて缺皿かけさらと名なづけ。落穂おちぼが生うるを
バ妹いもととして。紅皿べにいろと名なづく。これハ久米くめのさら山やまによりての名ななるべし。されバ月日げきに閑守けんしゅなく。

缺血紅血（ママ）健（ママ）に生育おひたちて。その標致きりやうも劣おとらず勝まさらず。只智恵才学ただちゑさいかくのみ。異ことかはりて。缺血ハよろ（ママ）づの技わざに伶俐かしこて。記憶ものおほも人にすぐれ。紅血ハすべての事に拙つたなくて。手習縫刺てならひぬいはりハさら也。落穂おちほハ久しく郡司ぐんじにしたがひて。和哥わかの道みちさへ見なれ聞馴きなれたれば。二人ふたりの女兒むすめに歌書かしよ。草紙物語さうしものたりなどを讀よするに。缺血ハ一きを聞きて二三をしれど。紅血ハとかく將もちあかず。かくて缺血紅血十三才なりけるころ。父ちちの源七ハ。かねて好む殺生このせつしよの。とにかく思ひとまりがたく。今ハ世わたる便たづにもあらねど。をり／＼山に入りて獸けものがりにするに。一日あるひまたれ亦例またれのごとく。只ひとり弓矢ゆみやを携たづへをらち。彼かを狩かりくらせども。この日ハたえて獲えもなく。むなしく家いへにかへらんとて。宇那堤うなでの森もりを越こえ來きれば。木立隙こだちひまなきその中に。凡二おとそふたかへ囲上も。あるらんとおぼしき枕きの木きに。女の姿画すがたゑを貼はりつけて。鉄箸かなばしよりもなほ太ふとき。一尺あまりの釘くぎを打うつたり。これハ世にいふ丑うしの時参ときまゐりて。人のを咒のろふ女子をなごのわざなごにこそ。と思ひつゝ。何心なくこれを見れば。妻つまの晚稻おしねが姿画すがたゑなれば。こハいかにと興きやうさめて。傍かたはらを見れば。又あなたすぎの枕おちほに。落穂すがたゑか姿画はりを貼はりつけて。おなじやうなる釘くぎを打うちおきしかバ。ます／＼驚おどろき呆あきれて。



つく／＼と思ふやう。二卒にほんの釘くぎを引拔ひきぬく。バ。釘くぎの穴あなより二ツの蛇へび。晚稻落穂おしねおちほが年來としとし嫉妬しつとの氣色けしきもなく。睦むつしく見えしかど。胸むねにたく火ハ消きる間まなく。互たがひに咒咀のろひころさんとて。かく浅あましき技わざをしつるか。と思ふに打うちもおかれず。とかくして「挿絵第二図」上上 忽然こつぜんとあらはれ出で。しばし啖くひあふ折をりこそあれ。風かぜさつ吹ふ來きり。二枚まいの姿画すがたゑを巻揚まきあげしが。蛇へびもゆくへなくなりて。釘くぎと見えしハ麻あしの角つのなり。あら不審いふかしと思ふにも。ひとりわが身を顧かへりれバ。主君しゆくん師高生害たかしやがいの砌みきり。墨すみの衣ころもに容さまをかえ。なき跡吊あとひらひ進まらすべきに。さハなくて。殺生ころししよをことゝし。

刺 神通を得たる鹿をころしたる。因果眼前報ひ來て。さしも睦しかりける妻と妾が。十年の月
 日を経て。互にころさんと誘ふ事。是た事とハ思はれず。二人の女兒もふ便なれど。只恩愛の羈を
 断。これを菩提の種として。繫き迷ひを」 上 12 荇萱の。ふりにし蹟を追ふにハしかじ。と一すぢに思
 ひ定め。山刀引ぬきて。髻ふつと切はらひ。いづくともなく立出けり。さる程に晚稲落穂ハ。次の
 日に至りても。源七かへり來ざりければ。驚き怪て。追く人を出して彼此を索撈せとも。終にその
 往方しれず。家内の愁傷子どもが歎き。目もあてられぬ形勢なり。出てより百日といふその日にもな
 りしかバ。世になき人と思ひ。諦 稲岡の誕生寺ハ。法然上人こゝにて生れ給ひし古蹟にて。今なほ
 誕生棕とて。大なる棕の樹あり。この寺すなはち菩提所なれば。源七が墓を建。法事追善歎のごとく
 営みて」妻と妾ともろともに。彼寺に参詣し。花の水を手向んとて。墓原の古井に立より。晚稲まづ
 水を汲んとするに。この井桁朽損じて。索八十尋にあまり。中くらくして水も見えず。釣瓶も又重け
 れハ。手繰揚腕もたゆく。こハいかにせんくともてあますを。落穂ハ見かねて。ともく索へ手を



かけしが。何思ひけん釣瓶を丁と衝は
 なし。直に晚稲が裾をはらへハ。憐むべ
 し。晚稲ハ釣瓶に巻こまれ。千尋の井戸
 へ沈みけり。落穂ハ心に笑を含。わざと
 慌し風情にて。あれよくと叫ぶ声に。
 所化たち走り來て大きに驚き。俄頃に
 棹を入れ錠を下。やう」 上 13 やく引上げた
 りけるが。晚稲ハ落るとき。井筒にて頭
 を打碎水に没て程へたれば。はや絆断
 てせんかたなし。落穂ハいよく泣声
 になりて。はやくわが家に告しらせ給
 はるべしといふに。所化たちこゝろえ
 て人を走らすれば。弁四郎ハ缺皿紅皿
 を伴ひてはせ來り。葬の事などなし果

さんとす。されバ缺皿ハわが身ひとつの悲しきに。母の死骸にとりつきて。共に死んと歎くにぞ。かくてあるべきにあらねバ。みなさまぐにひこしらへ。源七が墓よりハ。少し隔て晩稲を葬。七日の法事など。よきに誂へおきて。四人もろともに家にかへりぬ。抑晩稲落穂ハ」(挿絵第三圖)¹⁴」年來如こゝろもなかりしに。この時にあたりて。忽地虎狼の心を挟みしハ。いかなる天魔の所為にやあらむ。高祖崩じて人彘行れ。頼朝薨じて良臣滅。妬婦の伎倆ぞおそろしき。かくて落穂ハ思ひのまゝに晩稲を欺きころし。おのれ女あるじとなりて。継子缺皿を憎事。只是讎敵のごとくすといへども。缺皿元より怜利て。聊もうらみず。落穂を実の母のごとく敬ひ親にも。なき父母の事一日も忘るゝ隙なく。人なき折ハつくゝと。身のはかなさもかこたれて挟き袂を絞りける。この時彼弁四郎ハ。憚るものなしと歛ひ。みづから落穂が後見と称し。只管酒を」¹⁵飲。よからぬ遊びに金錢を費して。程なく家も衰へ。奴婢もみな身の暇を乞て。おのがさまぐ出さりける。落穂もこれを氣疎くおぼえ。弁四郎にたびゝ呉見すれども。露ばかりも用ず。されバとて叔父の事なれバ追出されもせず。せんかたなくて半年あまりの月日をおくりしに。思ひもよらず里人ども。源七を伴ひ來ていふやう。けふ塩垂山にて源七どのを見かけしゆゑ。無体に引とらへてつれ來れり。この人今ハ世になきものとおもひしに。神かくして。天狗などの誘ひゆきしとおぼえたり。いざゝ通与し進らするぞ。とみな口々にどよめけバ。落穂ハさう也。二人の女兒も夢かと」ばかりうれしくて。走り出て縋りつき。泣つ笑つ立さわげど。源七ハ物もいはず。只きよろゝと見まはしたる。眼ざしも生平にかはり。五體垢つき髻生出。ありし姿に戻なれバ。まづ心を鎮め」さするにハしかじとて。奥の間へつれ行。蒲團うち被せて寐かすとそのまゝ。たはひなく眠臥。明る朝やうやく人ごゝちつきたりと見えて。みづから起出。さてわれハいかにして家にハかへりつらんと不審バ。みなぐうれしくて。ありし事ども物かたる中にも。缺皿ハ母の晩稲が取期の形状。涙とゝもに語れども。源七ハあへて驚き悲もせず。何事も過ぎりし事ハ。只夢のごとくにて。わが身の事」¹⁶さへしらずといふ。やがて湯に入れ髪ゆいけれバ。さのみ衰も見えずして健なり。缺皿ハこの世にとも思はざりし。父がふたゝび帰りしかバ。孝行日來にいやまして。人手もからず勦れバ。落穂ハわがむごくあたりしを。父に告るかと推量して。いよく缺皿を憎こと甚し。しかれども源七ハ。そのこゝろ鈍くなり。二人の女兒を愛しもせず。只落穂が色に愛て。あけくれ睦み相語ふ程に。落穂忽地懷肝して。やうやく月もかさ

なりぬ。

第三 宇奈堤の椎

落穂ハ源七が。子ども等を愛せず。却てうるさき風情なれバ。」これを幸ひに。をり／＼缺血をあしさまにいいひなして。下女のごとくに責つかひ。さもなく事をはしたなく。笥りて打擲すれバ。紅皿も又これをよき事として姉を敬す。少しの過をも母に告て折檻させ。よろづわがまゝに動止ける。頃しも九月の末なれバ。宇那堤の森にゆきて。椎実拾ひ來よとて。落穂ハ朝まだきより。缺血をつかはしける。缺血母の仰をうけて。既に立出んとせしに。秋の日のならひとて。一むら雨のはら／＼と降來るにぞ。ふるき竹笠を打かふり。ひとり彼森にゆきて椎実をひらひぬ。浩処に國守赤松上総介義則。播磨。美作二ヶ國の領分。巡檢の為。許多」¹⁷の從者を召つて。この森蔭を過給ひしが。缺血が為俵をつく／＼と御覽じて。轎子を停させられ。彼女子を招呼ぶべしと仰あれ。近從の侍。承り。缺血を轎子ちかく伴ひ參る。時に赤松殿宣ふやう。われこのごろ當國を巡檢するに。領分の民百姓。老弱男女のわかちなく。群り集て行列を見物す。しかるに汝いまだ年をゆかざれバ。なほ競ひても見るべきに。さハなくして見かへりもせず。只一心に椎をひらふ事。是いかなる故ぞやと尋給へバ。缺血答て。わが母。この森にゆきて。椎を拾ひ得させよとハ申つれど。相公の行列を見」たてまつれとハ聞え候はず。よりて私の壯觀に心をとめず。母の仰を重しとするが故に。かく御不審を蒙り候かと申けれバ。赤松殿大に感心あり。汝年紀ハいくつぞ。名ハ何といふと問給ふに。缺血と呼ばれて十四才になり候と答ふ。赤松殿又宣ふやう。汝ハ稀なる孝女なり。今椎を拾ふを見るに。賴政が故事さへ思ひ出らる。汝彼賴政が椎の哥をするや。いかにと宣へバ。缺血莞尔として。むかし賴政朝臣三位の望ふかゝりしに。齡かたぶくまで四位にておはしけれバ

登るべきたよりなき身ハ木の木に椎を拾ひて世を渡かな」¹⁸

と詠ぜしかバ。七十五才にて三位に叙せられ給ふよし。盛衰記にハ見えたれど。玉海の説によれば。治承二年十二月廿四日。清盛入道淨海のすゝめによりて。賴政を三位に叙せらる。是第一の珍事也と記したり。盛衰記ハ。後に。葉室垂相の書あつめ給へるものなれバ。作者筆を揮ひて。滑稽をつくせしと見ゆるところもあり。と聞及びて候。又前の哥。椎を四位にいひかけたれど。椎ハしひの假名。

四位はしみの假名にて。ひ。ゐ。の違あり。すべて頼政朝臣ハ。世に高き哥人にておはせしかバ。彼もその人の哥也。これも彼朝臣の詠也。附會の説をなす事」おほしとぞ。この事いかゞ候やらん。と憚る氣色もなく申上れば。赤松殿ますく感じ給ひ。こハ珍らしき才女也。定て哥をも嗜なるべし何をや題にして。詠すべきと宣ひつゝ。傍を見かへり給へバ。森の中に古き地藏堂ありて。何人の願だてせしにや。皿に塩をうづたかく盛りて。供おきしが。向の雨にうたれて。その塩半解たるを。近従に仰てとりよせ給ひ。又松の小枝を手折らせて。塩の上に挿み。いかに女子。これを題にして。哥つかふまつれと仰ければ。缺皿。

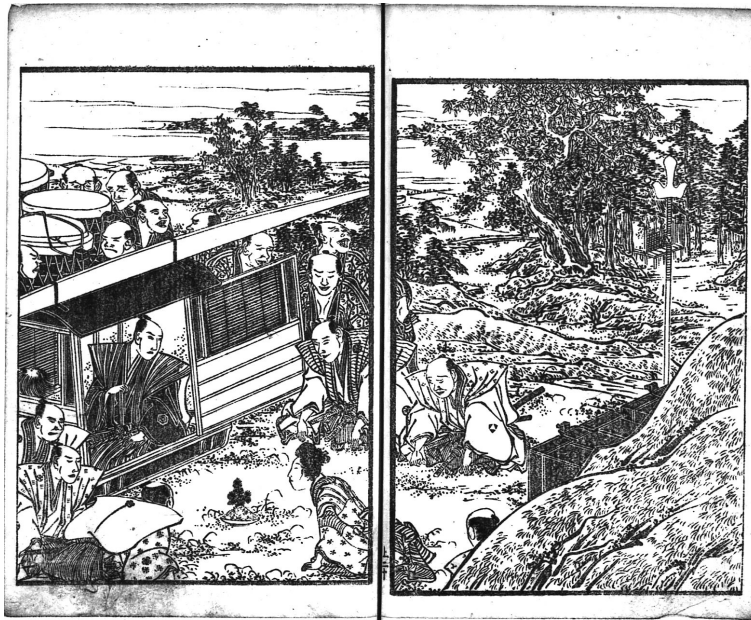
美作や皿てふ山の雪とけて塩垂峯にかよふ松風」上 19

と申ければ。主従感吟大かたならず。嗚呼と賞して止ざりける。赤衾殿只管その才に愛給ひ。汝今より給事せよ。直に伴ひゆくべしと宣へバ。缺皿うけ給はり。すべて女子ハ。親のゆるしなくて。身を人に倚せずとこそ申なれ。ねがはくハまづ父母に仰下されて。そのゝちに参り候はんと申にぞ。げに

理と承引あり。よくく彼が住處を尋

させられて。津山のかたへ過給ふ。缺皿ハ此問答に隙どりぬれば。かへり遅しとて。母の怒やし給はん。はやく家路に趣くべしとひとり言し。拾ひあつめたる椎の袋を引かたげ。何ごゝろなく見あぐれば。いくとせか經し椎の梢に。一口の刀「挿絵第四図」上 20

ありて。その下緒はづかに枝にかゝりたれハ。かゝる所に。人のおきわするべきにもあらず。これハ近曾の山洪水に流れ來て。おのつからこゝに懸りつらんと思ひ量やがてわが家へ立かへれハ。落穂見ると声をかけ。何とてかく



ハ遅かりし。走り使に假托て。道草くふがづらにくし。けふハはや宿し^しがたしと罵りて。帚^{ほうき}ふり上げりうゝと打居^{うちす}れバ。缺皿^{かけさら}ハ逃^{にげ}もやらず。母様^{ははさま}ゆるし給へ。かさねてハはやく帰り候べしとぞ賄^{わづ}たりける。浩^かる折しも。赤松家の近臣^{きんしん}從者^{ともびと}四五人を召つれて入り來り。この家のあるじ。源七が女兒^{むすめ}缺皿事^{かけさら}。孝心^{こころんさい}才智^{さいち}すぐれしを。國守^{こくしゆ}義則^{よしのり}殿^{どの}聞^{きこ}し召^めせ。給事^{みやつかへ}」上²¹。させよとの仰^{おほせ}にて。すなはち衣服^{いふく}の料^{りやう}として。金子^{きんす}百兩^{ひゃくりやう}を下^{くだ}し給ふなれハ。明日^{みふ}津山^{つやま}の御旅館^{ごりよくん}へ召^めし出^いべしと述^つ訖^{きは}れバ。落穂^{おちほ}ハ呆^{あき}れて回答^{こたへ}もせず。走り入りてかくと告^つるに。源七^{げんしち}袴^{はかま}引^ひかけて出^でむかへ。叮嚀^{ていねい}に挨拶^{あいさつ}し。違背^{みはい}なく御請^{おんけい}を申^ますにぞ。近臣^{きんしん}ハ彼金子^{かのきんす}を通^{わた}し。諸事^{しよじ}の手都合^{てつがう}などいひ聞^きてかへりぬ。されバ落穂^{おちほ}ハつくづくと思案^{しあん}して。叔父^{おじ}の弁四郎^{べんしろう}を物陰^{ものかげ}に招^{まね}き。御身^{きみ}も聞^き給ふ如^{ごと}く。けふ思^{おも}ひもかけず。缺皿^{かけさら}を國守^{こくしゆ}へ召^めさるゝ事^{こと}。腹^{はら}たゝしくも覺^{なり}る也^{なり}。わらハおもふに。赤松殿^{あかまつどの}も。缺皿^{かけさら}が事を。人傳^{ひとつて}に聞^き給ひし^しのみにて。いまだ見給^みひし事^{こと}ハあるべからず。」しかれハ今宵^{こんけい}缺皿^{かけさら}を追^おひうしなひ。わが女兒^{むすめ}紅皿^{べにだいら}を。缺皿^{かけさら}也と偽^{いつは}りて。國守^{こくしゆ}の御許^{おんもと}へまゐらすべし。よしや紅皿^{べにだいら}ハ。姊^{あね}ほどこゝろ利^きずとも。親^{おや}の慾目^{よくめ}かしらねども。標致^{はりやう}ハたちまさりて見ゆるに。なほ花やかに装^{よそは}飾^{かざ}らば。相公^{さうこう}にも愛^{めで}させ給はぬ事あらじ。御身^{ごんや}今夜^{こんや}かやうく^{はから}に計^はひ給へ。とさゝやけバ。弁四郎^{べんしろう}大に歎^{なげ}び。惡事^{あくじ}ハ元より得物^{えもの}なり。缺皿^{かけさら}をつれゆきて。室^{むろ}の遊女^{ゆうぢよ}に賣^う遣^やらバ。身價^{みんげ}ハ骨折^{ほねをり}折^を貫^{くわん}。うまいくと心に點頭^{うなづか}。一議^{いちぎ}にも及^{およ}ず納得^{なつとく}して。日のくるゝを待^{まち}つけつゝ。初夜^{しよや}過^する頃^{ころ}暗号^{あんごう}を定め。缺皿^{かけさら}に手拭^{てふき}銜^はせ。古き葛籠^{つづろ}に投^な入^いれて。脊^{せな}に」上²²。楚^{しつ}と老ぬれど。足腰^{あしこし}たつしやな貪慾^{どんよく}阿爺^{おやぢ}。跡^{あと}をも見^みずして走^{はし}り出^で。宇那堤^{うなで}の森^{もり}まで來^きりしに。ゆく先^{さき}しれぬ宵闇^{よひやみ}に。尾花^{おはな}戦^{せん}ぐと見^みえるが。思^{おも}ひもかけず一ツの狼^{おほかみ}。弁四郎^{べんしろう}が瘦^{やせ}骸^{がい}へ。會^あひもなく囓^{かみ}つけバ。噫^{あつ}と一声^{ひとこゑ}弁四郎^{べんしろう}。横^{よこ}にどつさり仆^{たふ}るゝ時^{とき}。古葛籠^{ふるつづろ}の底^{そこ}抜^ぬて。缺皿^{かけさら}撲^は地^{はた}と轉^まび出^で。この光景^{ありさま}に驚^{おどろ}き慌^{あは}て。口^{くち}の手拭^{てふき}かなぐり捨^{すて}。肢體^{しだい}わな／＼命^{いのち}の際^{きは}。逃^{のが}るゝたけハ逃^{のが}れて見^みんと。木^こだれし枝^{えだ}に手^てをかけて。椎^{しひ}の梢^{こすゑ}に攀^{よちのぼ}登^{のぼ}り。こゝろの中に念^{ねん}仏^{ぶつ}し。幹^{みき}をかゝへて居^ゐたりける。さる程^{ほど}に狼^{おほかみ}ハ。弁四郎^{べんしろう}を飽^あくまで啖^{くら}ひ。缺皿^{かけさら}が登^{のぼ}りたる。椎^{しひ}の「梢^{こすゑ}をうち瞻^{まも}り。尻^{しり}声^{こゑ}長^{なが}く吼^ほるにぞ。旣^{こた}に響^{ひび}て物凄^{ものすご}し。友^{とも}よぶ音^ねにやよりぬらん。いづちともなく居多^{あまた}の狼^{おほかみ}。彼此^{そらこち}よりあつまり來^きて。食^は残^{のこ}したる弁四郎^{べんしろう}が。死骸^{しがい}を残^{のこ}らず啖^{くら}竭^{くひつく}し。なほ飽^あすやありけん。互^{たがひ}に生人氣^{ひとけ}を颯^かづつけく。椎^{しひ}の圍^{めぐり}に居^ゐならびて。落^{おち}バ啖^{くら}んと構^{かま}たり。これを見る缺皿^{かけさら}ハ。更^{さら}に魂身^{たましひ}に添^{そは}ず。慄^{ふる}るまゝに木^きも戦^{ふる}へ。怖^{こは}き悲^{かな}さやるせなし。いつまで瞻^{まも}りつめるとも。はてしなしとや思^{おも}ひけん。一頭^{いっぴき}の狼^{おほかみ}。椎^{しひ}の根^ねに身^みを倚^よせて。べつたり平^{ひら}めに匍^は匍^ば。又一頭^{いっぴき}がその上^{うへ}へ。次第^{しだい}

く／＼に跛累り。その身を梯子に積上て。やうやく」上 23 梢にちかつけば。缺血ハ一枝づゝ。上へ／＼と攀登りしが。図らずも昼見たる。梢の刀に手がさはり。透し眺てふかく歎び。今しらずして刀ある。椎の木へ逃登りしハ。神佛の債なるべし。ちかづかばかなはぬまでも。切はらはんと腰に服み。ふたゝび上へ手を揚れば。むんじやりさはるハ正しく獸。さてハ上にも狼あり。とても逃るゝ道なしと。なか／＼に胸をすえ。件の刀を引抜て。目當の枝を切て落せば。どつさり物のおつる音して。居多の狼入乱れ。互に囓あひ挑あひ。吼る声いと囂く木をも拔べき勢ひなりしが。何とかしけん。紛々」と。みな東西に逃うせて。松風のみぞ残りける。かくて夜もしら／＼と明ゆくころ。播州。佐用。山脇の郷士。廣岡兵衛といふもの。所用ありて備中の高瀬へ赴きしかへるさ。この所を通りかゝりしが。と見れば椎の木のみに。居多の狼食ころされ。あるひハ引裂れて死したるに。梢を見れば十四五才の女子。枝に携。眼を閉。只忙然たる容なれば。大に驚。怪みつゝ。従者に下知して。女子を梢より扶卸させ。さま／＼勦りてその故を問バ。缺血やうやく人ごゝちつきて。ありし事ども物がたるにぞ。兵衛ふかく憐みて。寔に御身ハ命」上 24 めでたき女子ぞかし。思はずも刀の挂りし。椎の梢へ逃登しハ。是運命の竭ざるところ也。思ふに。木の股なる獸ハ熊なるべし。熊ハ夏より秋の間。木の上に栖ものにて。その木を熊棚といふ。彼熊御身に枝を切おとされ。一時の怒に乗じて居多の狼を引裂つるが。やがて御身の僥倖となりぬ。誘給へ。家に送りとゞけんといへハ。缺血荅て。かく庇を蒙りて。介抱にあひまゐらす事。身にあまりてよろこばし。さりながら悪人にもせよ。眼前。狼に大叔父弁四郎を啖殺され。わが身ひとり家にかへらんも面目なし。元是母に憎れて。家を迫遣られたる事なれば。只潔く自害して。母の心を「安るこそ。子たるものゝ誠なれ。慰に身のよしあしを明すときハ。母の悪事を明すにひとし。南無阿弥陀佛といひもあへず。刀を咽喉へ衝たてんとするを。兵衛手ばやく押とゞめ。飽まで強顔繼母に。孝心をたて融し。身をころさんと思ひつめしハ。類すくなき孝女也。今の命を吾に預。身の落着をも。慮らバ。われ又あしくハ計はじ。とさま／＼にいひこしらへ。昇せ來りし行橋に。缺血を扶乗せ。終に播州に伴ひかへり。まづ下女のごとくにして召仕しかバ。缺血も又再生の恩を感じ。心を竭して奉公せり。

第四 あやしの有身

さても落穂ハ。夜明て後。弁四郎が宇那堤の森にて。狼にや啖れけん。首のみありしとて。里人がもて来て備由を告しかバ。うち驚きつゝも。缺皿ももろともに。啖れつらんと推量し。弁四郎が首をバ寺に送りて埋させ。源七にしかぐの物がたりしていふやう。弁四郎どの。日來の悪事したらざして。缺皿を盗出し。君傾城に賣代なさんとと思ひけん。疇昔伴ひ出たるを。わらはも眠りてしらざりしが。目今叔父御も缺皿も。宇那堤の森にて。狼に啖殺されし。と告るものあり。さて痛しきハ缺皿也。そも何とせんと泣声になりてかき口説バ。源七あへて驚きもせず。されバとて死したるものが。又生べきにもあらず。といひて悲む氣色もあられバ。了得の落穂も呆果。顔うち瞻つゝ口を閉たるが且くしていふやう。けふ國守より缺皿を迎に來し給ふとも。その人なければいひわけせんもむづかしかるべし。わらはが思ふハ。紅皿を缺皿にして送りやらバ。事故なくおさまることもありなん。この事いかゞ思ひ給ふと問。源七點頭て。かゝる事ハわれに問までもなし。とかく御身がこゝろまかせに計ひ給へと答けるにぞ。落穂飲びて俄頃に衣服などとのへ。紅皿を摺磨て。花やかに打扮せ。迎遅しとまつ程に。一挺の轎子を^下扛らせ。若黨四五人さし副て。國守の仰として。缺皿の迎ひに來れり。とくくと案内すれバ。落穂出むかへて。さまぐ饗應し。やがて紅皿を引あはすれハ。若黨これを缺皿也とこゝろえ。轎子へかきのせて津山の旅館へ立かへり。缺皿参りぬと申せバ。赤松殿早速召出して見給ふに。その容止少しは肖たるやうなれど。きのふ見給ひつる缺皿にハあらず。こハこゝろえずとおぼして。厳く縁由を問せ給ふに。紅皿大に迷惑し。且くハ陣じけるが。問つめられてせんかたなく。母の落穂が悪心にて。缺皿を追ひうしなひ。わらはは缺皿也といつはりて進らせたり。と件々申上し程に。義則大に怒り給ひ。源七ハわが領分にありながら。われを侮りて詭を「行ふこそ安からね。いそぎ召捕來たるべし。と以の外に憤給へハ。逸雄の若侍。承るといひも果す。身捨て走り行。源七落穂を追とり巻。國守赤松殿の御詫なり。誘参り候へと呼りて。引立んとする所を。源七はやく身をかはし。前にすゝみし二人の捕手に。もんど

り打せて投退れバ。こハ朽をしと居多の侍。われ組とめんと闘くを。ほとりへも寄つげず或は蹴たふし突仆す。電光石火の早技に。とり逃しなバかひなしと。手にく刀を拔はなし。透間もなく切てかゝれバ。落穂ハ慌て途をうしなひ。迷廻る膳へ。刀尖翦て切こまれ。うんと倒るゝ深手の鮮血。源七が膝ハ蒐ると見えしが。あやしかなその形状。忽地一角の罨²と変じ。掾より庭を飛越て。往方もしらずなりにけり。大勢の捕手これを見て。且驚き且怪み。忙然としてありけるが。これたゞ事にあらずとて。まづ落穂を引起して。その瘻口をあらためみれバ。懷妊して既に月をかさねしとおぼしく。胎内の子。半生れ出けるが。その形人間にハあらずして。毛いろ蒼き鹿なれば。ますく怪み。片息なる落穂を戸板へ乗せ。津山へつれかへりて。かくと告まゐらすれハ。義則甚不審給ひ。幸ひ落穂いまた死なであれバとて。縁故を糺明させ給ふに。はじめハ身を「挿絵第五図」^{下3}



恥て。とかくいひかねけるを。いはすハ紅血をも殺すべしとあるにぜひなく。夫源七が。塩垂山に年経る牝を射たりし事。そのゝち源七家出して又立かへりし事。わが身の悪心にて。卒妻晩稲を欺き殺し。又叔父の弁四郎を相語て。缺皿を追うしなんとせし途中にて。弁四郎も缺皿も。狼に喰れしなるべしと思ふ事。苦しき息の下に白状す。義則聞し食て。しかれバその牡鹿。仇を報ん爲。おのれ源七と化て。彼が妻を耻しめ。すべて一族に災せんと計りしならん。是併。落穂が悪心の天罰にて。畜生の子を孕て死耻をさらす事。

因果戴面の道理也。世の見懲らしに。胎内^{下4}の子ハ刺ころし。落穂とゝもに大路に曝すべしと仰ありて。形のごとく行はれしに。落穂ハますく苦痛に堪ず。その夜の中に。狂ひ死にぞ死したり

ける。義則又宣ひけるハ。紅皿事。その心母に劣らず。現在姉を冤て。ひとり富貴をおもへるハ。人倫の所爲にあらず。彼をバそのまゝ追ひ放つべしと仰付られて。次の日白昼に追ひ拂はる。紅皿ハこの日來わがまゝ氣隨に生育しに。母に後れ家をうしなひ。繁ぬ艫のよるべなく。涙の潮袖にみちて。往方定ず吟咄ける。親の因果が子に報ふ。世の常吉も宣なるかな。是ハさておき。」廣岡兵衛ハ。缺皿を播磨へ伴ひかへりしより。既に三年の月日を経て。缺皿十六才の春をむかへ。いよゝゝ信やかに奉公す。しかるに兵衛が住ひする。山脇の北のかた。奥長谷といふ深山に。山神廟あり。廟内頗廣けれども。としゝゝに荒はてゝ。月と雨のみもる軒の。かたぶくまでに上久しが。この廟へよなゝ異形のものあつまりて。拍子おもしろく踊遊ぶといふ事を。このころもつはら風聞せしかバ。兵衛傳へ聞て。わが住むほとりの山を。妖怪の栖とせんも本意ならず。ひそかに退治せばやとおもひ。弓馬の技ハ達者也。勇氣も又人に勝れたれば。家」^下内⁵のものにもしらせずして。一タ弓矢手挾て。只ひとり奥長谷に至り。彼廟に通夜して。妖怪の出るをまつに。夜も深々と更さき。遠き寺ゝの鐘おとづれて。丑三ころとおぼしきに。居多の松明をふりてらして来るものあり。これこそ変化ごさんなれ。と身構せしが。佖と思索して梁の上に攀登り。姿をかくしてこれをまつに。程なくどやゝと裡に入るを見れば。いづれも頭に角一ツありてその面長し。このうちに大将と見えて。一歳大きやかなる妖怪。上座に無手と押なほれば。残るハ左右に列坐たり。時に變化の大将のいふやう。むかし木村源七に。わが牝を射ころ」され。その無念骨髓に徹し。年來怨を報んとねらひしに。源七ハ勿論。妻も妾も操正しく。聊も過なければ。その隙を窺ふ事かなはざりしに。落穂が生し紅皿ハ。その才智缺皿に及ず。生育まゝに世の人も。缺皿のみを誉るによつて。落穂すこしく妬の心を生じたり。われこの虚に乘じ。神通をもつて源七に。妻と妾が互に咒咀殺の俸を見せしかバ。彼忽地無常を觀じて妻子を棄たり。こゝに於ていよく落穂が悪心を募らせ。卒妻晩稻をころさせて。缺皿に憂めを見せ。われ又源七と化て落穂に胎らせ。終に缺皿をも追ひうしなひて。その一家を殺し竭さんとした」^下りしも。はからず國主の武徳によりて。わが姿を見あらはされ。剩わが子をもころされたり。さるあひだ。源七が女兒缺皿。當國山脇にあれば。まづこれを殺してのち。源七紅皿をも殲しにし。かさなる怨を雪んとおもふ也。おのゝいかゞこゝろえ給ふといへバ。みな声を揃へて。然るべしと答ふ。兵衛これを聞濟して。雁股の征矢拔出し。十二東三伏。忘るゝばかり

引しぼり。件の大妖怪が脊の真中をねらひつゝ。矢声高く蹀と放バ。燈火一度にはつと滅。變化ハ見えずなりにけり。兵衛やがて梁より下たち。用意の松明に火をうつして。廟の隅々を見れば。鮮血少ししたゝりて。獸の尻尾あり。そのさま牛の尾に似て毛色」蒼し。さてハ彼妖怪ハ。年経る蠻なるベきが。われに尾を射切られて逃亡しとおぼえたり。むかし唐山淮南の陣氏といふもの。田に出て二人の女子にあふ。雨ふれどもその衣湿ず。陣氏あやしみ。鏡を照してこれを見れば鹿なり。すなはち刀をもつて斫らんとするに。形見えずなりぬとかや。又わが朝にハ源の經基王。内裡に猛き麋走り入り。天子を劫し奉りしを。忽地射て殺し給へり。しかれば和漢に。鹿の妖怪ある事例なきにあらず。惜かな今の鹿。僅にその尾を射切て走せたる事よとひとり言し。天明のころ彼尾を携て家に立かえり。妻の小舟にありし事ども」^下物がたれば。小舟驚きて夫の武勇を感じ。その恙なきを歎べり。この時缺皿ハ。次の間にて。主人の話をもれ聞。走り出ていふやう。只今宣ひしを聞くに。父母兄才の身の果も。みな彼鹿の報ひならバ。父と妹を苦しめずと。わが身ひとりをとり殺し。怨をはらしてくれよかし。と前後不覚に歎くにぞ。兵衛夫妻さまぐにいひこしらへ。汝が欺きさる事なれど。因果の脱がたきをいかにせん。殊さら父源七も。なほ世にありとおぼゆれば。それを心の便にして。ふかく愁ることなかれ。かゝる事を人しらバ。父母の耻をますに似たり。あなかしこ彼鹿がいひし事。傍輩にも語るべ」からずといひ教れば。缺皿もげにと思ひて。やうやく涙をとゞめける。そのち兵衛ハわが武勇を示さん為。彼鹿の尾を。刀の尻鞘に作り。常にこれを服て身を離ことなし。抑この廣岡兵衛が父ハ。元雲州の浪人にて。外戚の所縁に因。この山脇の郷士となりて。今二代に及べとも。赤松家に仕へるにもあらず。されど兵衛が武勇。日を追て國中に名をしられ。國主義則然望のあり。今茲四月のころより。度々召れし程に。兵衛はじめて出仕して。武藝の古實など申上しかバ。赤松殿いよく愛し給ひ。そのちをりり召れしに。ある時義則の坐^下右に一連の数珠あり。兵衛不審てその故を尋申せバ。義則荅て。この数珠ハ。美作國福岡の庄。誕生寺の椋の木を伐りて作れるものにして。わが父律師則祐常に襟に懸て出陣し。数度の武功をあらはし給へり。よりてこの数珠わが家にてハ。最秘蔵の重器なりと語り給へバ。兵衛もかねて則祐の武勇を慕ひしかバ。口にこそいはね。何となくほしげなるを。義則はやく猜して。尋常の器物ならバ。彼に与るとも惜に足らねど。この数珠のみハその望をかなへがたし。とこゝろの中に應荅して。さらぬ俵にて在しける。」

第五 十枚の皿

時既に六月炎暑の季候にもなりけるが。廣岡兵衛が家に。もち傳へたる皿十枚あり。是ハ異朝後周の柴世宗御批の青磁にて。

雨過青天雲破處

○這般顔色做將來
○フヤナル

といふ二句を録したれば。世に稀なる陶器なりとて。これを愛玩する事壁のごとし。もし奴婢悞つこの皿を打碎くものあるときハ。その罪。人を殺すにひとしく。忽地首を刎らるべし。と先祖より家の掟をたてたりける。かゝる秘藏^{ひさう}の皿なれば。生平にハとり出すこともなく。年に只一度土用の風に當るのみ。よりてこれを取り扱ふもの。こゝろ利たるにあらねば委ねず。缺皿ハその性しづかなる女子にて。この任に堪たるもの也とて。今茲ハ彼皿の出納をまかせしかば。一日缺皿これを拭ひおさむる時。夏の日のならひにて。さしもの晴天見るうちにかき曇。ゆふ立さつと降出して。一声の雷。項の上へ落るばかりに鳴わたれば。缺皿噫と怕れて。思はず手にもつ皿をとり落し。忽地微塵に打碎きぬ。こハ浅まし何とせんと慌忙。その虧をひろひつゝ。継あはせてもまとまらぬ。身のおさまりを案じやり。周章大かたならざれば。傍輩の下女會合來て。あら笑止や。御身このまゝあるときハ。終に命をとらるべし。はやく逃去り給へかし。とくゝとせり立れど。缺皿ハなほ泣沈み。はかばかしく回答もせず。この声をもれ聞てや。臺所にて薪を割てありし。奴隸勇蔵といふもの。薪割を引提つゝ。こゝに來て。缺皿が傍にどつかと坐し。われつらゝ思ふに。この皿のあらん限りハ。家に罪人絶べからず。一枚碎て殺さるゝも。十枚碎て命をとらるゝも。その罪ハひとつ也。われ今残る九枚をも¹⁰打碎き。以後の愁を断べしといひもあへず。彼薪割をふり揚て。はつしと打バ件の皿。碎て四方へ飛散たり。こハ何事ぞと缺皿も。下女等も一齊驚きさはぎ。狂氣やしたる勇蔵殿。過してもいひ訳の。ならぬ掟としりながら。われから求めて碎きしハ。年わかい身を世に倦て。はやく死たい願ひかや。いとおぼつかなし短氣なり。とみな口々にさゞめけバ。勇蔵少しも怖るゝ色なく。皿を残らず碎くからハ。殺さるゝハ覚期のまへ。わが一命を擲て。後の罪人あらせじと計る事。家の為主人の為。又この家に奉行する。下男下女^{げなんげぢよ}の爲なれば。命ハさらく惜からず。と詞すゝしくいひ放す。浩處へ主人兵衛。城中よりかへり來て。この光景に驚き怒

り。まづその故を糺明するに。勇蔵憚る所なく。缺皿が過わが身の所存。詳に申せしかば。兵衛ま
すく憤りて。勇蔵をしばし白眼。汝ハ幼少より召仕ふかひもなき。不忠不義の愚者也。過て打碎
くさへ。殺すべきに定おくを。みつから碎て主を侮るこそ安からね。以後の見懲し兩人とも。覚期
せよと罵りつゝ。缺皿と勇蔵を。高手小手に縛て。庭の松に繫とめ。なほ匍りて¹¹ いふやう渠奴等
ハ今夜蚊に吸せ。思ふまゝ苦しめて。その後空井へ投下し。生埋になしくれん。もし逆しなバ汝等
も。同罪なるぞといひわたし。一室に入りて休足せり。兵衛が庭の空井戸といふハ。求めて堀しもの
にあらず。むかしよりこの竈ありしを。便物数奇にて。井戸のごとくせしものにて。たえてその
深さをしらず。日毎に芥を掃入るれど。終に埋りし事もなきに。彼二人今宵その裡へ投こまれなバ。
生ながら捺落の底へ陥るに異ならず。と妻の小舟もふかく憐み。侍兒婢もろともに。痛しくハ思へ
ども。主人の怒りつよければ。いひ「宥んとするものもなく。うちこそりつゝさゝやきあひぬ。か
くてその夜も暮過て。雨ハ霽ても身ハ晴ぬ。心小ぐらき木下闇。膚を藪蚊に刺れても。拂はん手さへ



かなはねバ。おなじ縹綫もわれ故に。
繁る罪のよしなやと。缺皿勇蔵を見か
へりて。御身筋なきわざをなし。みづ
から非命に死給ふも。過世の悪因なる
べけれど。かねてわらはと訳ありて。
方人やし給ひし。と人に思はれんもい
と朽をし。今ハこの世のおもひでに。
卒心あかし給へといへば。勇蔵莞然
とうち笑て。われハ元雲州富田の城主。
塩谷駿河守師高の家臣に。木村源七が
¹²下甥。同苗三重之介といひしものに
て。師高滅亡の時ハ。僅七才なりしが。
叔父源七に伴れ。富田の城を落ゆく折
しも。乱軍に隔られ。ひとり彼此を吟呻

ありきしに。伯耆の黒坂にて。前主人左膳様に扶られ。年來の養育も。郎君兵衛様もろともに。武藝の稽古讀書算法。下郎にハ不相應。弓の引やう太刀ぬくすべまで。習得たりし鴻恩を。思ふにつけて浅ましや。この家の掟とて。皿を碎ハその人の命をとるとハ氣疎き成敗。世に播州の皿屋敷と。唄るゝ朽をしき。御子孫長久の基に」〈挿絵第六図〉「下」¹³ あらず。何とぞ家法をたてなほさんと。忠義に凝たる心から。日來の願ひけふの今。わが身を捨る陰徳に。主家の繁昌あらせたさ。さてこそかくハなしたれと。語れば缺皿大に驚き。さてハかねて聞及ぶ。三重之介とハ御身よな。わらはすなはち源七が。女兒にて候ぞや。父の身の果わがうへの。はじめをいへバ如此くも也。をはりを語ればかやうく。と話しつ聞つ従才どち。互に縲綬の名對面。しらぬ事とてこの年月。ひとつ第宅にありながら。明しあはねハしりもせず。今般の際に名告あふ。げにも親身の泣よりぞと。」¹⁴ 共にかくとも哀れ也。されバ夏の夜明やすく。梢の蟬も声するに。下女婢めを覚し。雨戸繰つゝ庭を見れば。缺皿勇藏ハ。夜の中空井戸へ投入られしとおぼしくて。女の髪の毛とところぐに乱れ散り何となく凄じければ。思はず襟元ぞつとして。走り入らんとする折しも。居多の捕手乱入し。捕たくと闘バ。兵衛臥房より走り出。こハ狼藉也推参也。何の罪ありて。かく手ごめにハなし給ふ。といひもあへぬに。物頭狛野靱負すゝみ出。罪なきものを召捕べきか。前夜相公の御寐所へ。何」ものとしれず謀び入り。御秘藏の数珠を盗て逃去時。義則いざとく在しませバ。むつくと起て鎗引提。逃すまじと追給ふに。彼賊迹足はやくして。築垣を飛越つゝ。往方なく逃うせし。跡に残るハこの尻鞘。皿の尾をもつて作るところ。定て件々覚あらん。しかのみならず。御辺かの数珠を懇望する事。相公にも猜しましませは。盜賊ハ問ずとも。廣岡兵衛に疑ハなし。いそぎ召捕り参れとある。御錠によつてむかふたり。と縁由聞く程不審く。疇昔までありつる尻鞘。いつの程にか赤松殿の寝」¹⁵ 所ちかくハ。誰がもてゆきし。と思ふにますゝ疑ひまどひ。しばし回答もなかりける。狛野靱負氣を焦燥。いひ訳あらバ城中にて。みづから仔細を申されよ。といひつゝ。信と注目すれバ。大勢おち合て兵衛に索をかけ。追とり囲で引ゆけバ。妻の小舟ハ轉いで。こハそも何の報ぞと。あくがれ歎くを下男下女。さまぐにいひこしらへ。やうやく套房へ伴ひ入れぬ。されバ家内の物思ひに。夏の日いと遅く暮て。小雨そぼくとふり出し。風も新に涼やか也。更ゆく鐘の数そひて。いと物凄き庭の回飛ぶハ蜚か誰魂かと。見る間に井戸より一團の燐火」陰々と燃上

り。缺皿かけさらがありし世の。姿すがたかはらずあらはれ出。さも苦くるしげなる声音こはねにて。件くだんの皿さらをかぞへける。一ツひとりか二人の取期さいぎ三ツみな四になき魂たまの。ふかく沈しづみし筒五ツ。六ツの街まちを迷まよひ來て。七ツ八ツと八丑三時うしみつとき。九ツ声こゑもかれぐに。十といひつゝわつと泣なく姿も声もおぼろけに。見る人膽きもを冷ひやしけり。かくのごとくなる事夜毎よごとにして。この沙汰世上さたせじやうに高く聞え。彼播州かのぼんちうの皿屋敷さるやしき。幽霊井戸ゆうれいみどといひ傳へ。かたり傳つたへたりけれバ。兵衛ひやうゑが妻つまますく悲かなしくて。夫おつとが不慮ふりよの禍わざはひにて。禁獄きんごくせられ命危いのちあやうき事。みな是缺皿勇藏これかけさらゆうざうを殺し給ひし祟たたり下16。ならん。せめてなき跡吊あとひきひなバ。その功德くどくにて夫の命。助かる事もやとて。一日横坂あるひよこさかの圓應寺えんおうじに參詣さんぎし。住持ぢゆうぢに對面たいめんして。怨霊得脱おんれうとくだつの事をたのみ聞え。既に立かへらんとせしに。この寺の門前てらもんぜんにて。おもひもかけず缺皿勇藏かけさらゆうざうにゆきあふたり。小舟をぶねハこれ幽霊ならめと見てけれバ。噫あゝとばかりにうち驚おどろき寺内ぢないに走り入らんとする。袖そでをひかへて彼二人ハ。声を等ひとしくして申やう。縁故このもとをしろしめさねバ。疑うたがひ給ふも道理也。われくその夜殺よころさるべしと思ひ究きはめしに。夜更人よふけしづま定りて後。兵衛様ひやうゑさまひそかに庭にはにたち出給ひ。わが先祖より定たる家法かほうとハいひながら。皿一枚の故をもつて。人の命をとらん事。不仁じんとやいはん非道とやせん。しかるに名詮自性の理みやうせんじせうのこころわりにて。缺皿と呼ぶ女子をなごに。彼皿かのさらをとり扱あつかせしハ。是缺損これかけそんすべき前表ぜんひやうなり。又勇藏ゆうざうが家いへを思ひ。主しゆうを思ひて。残る九枚のこくまいを悉く打碎うちくだしハ。類稀たぐひまれなる大丈夫。賞せんじやうするになほあまりあり。さりながら。今明白いまあからさまに二人を助たすけなバ。先祖せんぞの掟おきてを破るに似たり。皿さへ家になくならバ。かさねて罪つみする人もなく。非法ひほうもこゝに事果はたて。掟おきても今より用なければバ。わが飲のむこびこれにます事なし。汝等なんぢらはやく立退たちのきて。時節じせつをまちて帰參きさんせよ。命いのちがはりの成敗せいばいぞ。と仰おほせも果はてず下17。二人の髻もとり刀やを抜ぬてかき剪給ひ。縛いましめの索解なほときゆる釋あたまさへして。剩路費あまたさへみちようの金子。十両を給はりしかバ。只是夢ただこれゆめのこゝちして。ふかく主君しゆくんの恩恵めぐみを感じ。二人もろともに宅地やしきを立退たちのき。夜明よあけて五六里落りおちのびしに。途みちにて聞バ兵衛様ひやうゑにハ。その朝不慮あさふりよに召捕めしとられ。禁獄きんごくせられ給ひし。といふハ実事まことかおぼつかなしと。立かへりつゝよく聞きに。その噂うはさ虚言そとごころならず。何とぞ御先途ごせんどを見とゞけて。再生さいせいの恩おんを報ほうじ奉たてまつるべくおもひ定め。この横坂よこさかに住家すみかをもとめ。圓應寺えんおうじの本尊ほんぞんハ。灵驗れいげん揭焉いひじるしと聞及ききおよべハ。二人日毎ひごとにこゝに詣まうて。主君まうてしゆくんの厄難救やくなんすくはせ給へ。と念ねんずる外ハ候はず。と語かたれバ小舟をぶねハいよく不審いふかり。わが夫の情なさけにて。御身兩人命助りしといふ事。更に誠まこととも思はれず。その故ハ。缺皿かけさらが幽魂ゆうこん。彼空井戸かのからみどより夜ななくあらはれ。碎くだけし皿さらをかぞふる声聞きこたるもあり。見たるもあり。その怨霊おんれうを鎮しづめん為ために。わらはも御寺みでらへ参りし。といひ聞するに缺皿ハ。思はず襟元えりもとぞつと

して。しばし疑念ハ晴ざりける。勇蔵や、沈吟して。何條さる事候べき。孤狸がその虚に乗じて。人を妖すわざくれにこそ。それがし今宵窺て。性倅見とゞけ候べしと申けれバ。小舟もこれに従て。互にその夜の暗号を定め。主従内外に別れ^下 18 去りぬ。さる程に勇蔵ハ。彼妖怪を為止んとて。その夜更て兵衛が庭に謀び行。築山の蔭に木がくれてこれをまてバ。聞しに違ず缺皿が姿。空井の下よりあらはれ出れハ。勇蔵楚と見定て。用意の手裏剣拔出し。はつしと打ハ手ごたへし。忽地井戸へ陥りしが。一反はねて踊り出るを。勇蔵透間もなく走り蒐り。十刀あまり刺とほせバ。さしもの化精よはり果。やうやく息ハ絶はてたり。家内の男女この胖響に驚きつゝ。手にく手燭を秉て走り出。みなくこれを熟視るに。缺皿が幽霊とおもひしハ。角一ツある鹿にして^下 19 「挿絵第七図」



蒼毛斑に生。大さ牛のごとく。尾ハなくして頸に一連の数珠を掛たり。是なん過し春。兵衛が奥長谷にて。尾を射切し蠻なるべきが。その仇を報んとて。兵衛に化て彼数珠を盗去。兵衛が刀の尻鞘を残しとゞめて。罪に陥さんとハなせしならん。とみなくはじめて曉つ。ふかく勇蔵を賞美せり。さて勇蔵ハ。この蠻を人夫に扛せて城中に参り。兵衛が罪なき事。件々申上。すなはち数珠を獻れば義則驚きよろこびて。早速兵衛を獄屋より宥し出し。只管勇蔵が誠忠を感じ給へバ。兵衛ハ罪なき明たちて。^下 20 飲びに堪ず。蠻の由來。

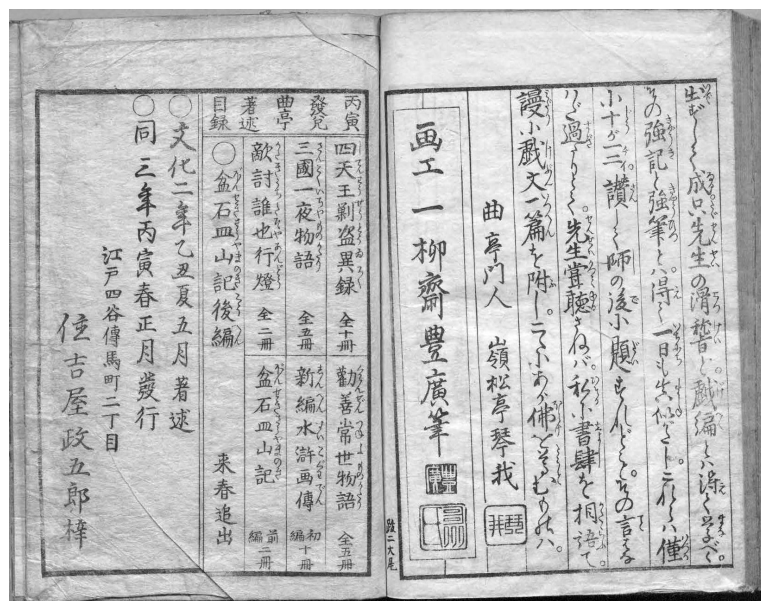
缺皿が事。くはしく演説せし程に。赤松殿再び驚嘆あり。彼缺皿ハ。前年狼に咬れつると聞たるが。さて八年來兵衛が家に養はれけるよな。いそぎ缺皿勇蔵を召すべしと仰ありて。御前ちかく召出され。汝等今下賤に落れども。その志ハ貴人よりも慕し。殊に缺皿と勇蔵ハ。従弟とち也と聞。われ

速秋宵の鬱悶を掃ふ。故に先生の戲号。國中に洋縊し。久方の天の覆ふところ。あらかねの地の戴(す)るところ。天上玉帝の護るところ。月天子の照すところ。猪牙舩のかよふところ。車子の到ところ。人のあゆむ所。雷吹のかゝるところ。凡血の氣あるもの称讃せざる事」戴 1 なし。こゝをもて遠方の賓客。近隣の坊友。肉几橋を下邳の垠に比してハ。霧を拂て訪に鶏明を早しとせず。著作堂を臥龍の庵に擬てハ。雪を踏て來りて鵝毛を辞せず。嗚呼。高かな先生の名。大なる哉先生の才。こゝろ尚古にありて今俗を事とし。よく自己を知て常に差る色あり。その性強記便敏にして。著述昼夜をすてず。起てハ記し臥てハ讀。一篇の作意はにぢり書の手簡より手がるく。一帙の草藁ハ。一句を」出ずして成。只先生の滑稽と。戲編とハ得て学べく。その強記と強筆とハ。得て一日も真似がたし。これらハ僅に十が一チ二イ。讀して師の後に題すれども。その言はなはだ過たりとて。先生嘗聴さねバ。私に書肆を相語て。謾に戲文一篇を附し。こゝにあが佛を尊むものハ。

曲亭門人 嶺松亭琴我 「我」

画工 一柳齋豊廣筆

「廣」「哥川」「戴 2 大尾



画工 一柳齋豊廣筆



曲亭門人 嶺松亭琴我



丙寅	四天王剽盜異録	全十冊	勸善常世物語	全五冊
癸卯	三國一夜物語	全五冊	新編水滸画傳	編初十冊
曲亭	敵討誰也行燈	全二冊	盆石血山記	編二冊
著述	目録		後編	
	○盆石血山記	後編		来春追出

○文化二年乙丑夏五月著述
○同三年丙寅春正月發行
江戸四谷傳馬町二丁目

佐吉屋政五郎棹

- | | | | | |
|----|--|-----|-------------------------------------|------|
| 丙寅 | 四天王剽盜異録 <small>してんわうせうとうめろく</small> | 全十冊 | 勸善常世物語 <small>くわんぜんつねよものかたり</small> | 全五冊 |
| 發兌 | 三國一夜物語 <small>さんごくいちやものかたり</small> | 全五冊 | 新編水滸画傳 <small>しんへんすいこくわでん</small> | 編初十冊 |
| 曲亭 | 敵討誰也行燈 <small>かたきうちたそやあんどう</small> | 全二冊 | 盆石皿山記 <small>ぼんせきざらやまのき</small> | 編前二冊 |
| 著述 | ○盆石皿山記後編 <small>ぼんせきざらやまのきこうへん</small> | | 来春追出 | |
| 目錄 | | | | |
| | ○文化二年乙丑夏五月著述 | | | |
| | ○同三年丙寅春正月發行 | | | |

江戸四谷傳馬町二丁目

住吉屋政五郎梓
〔奥付〕

盆石皿山記後編

【表紙】

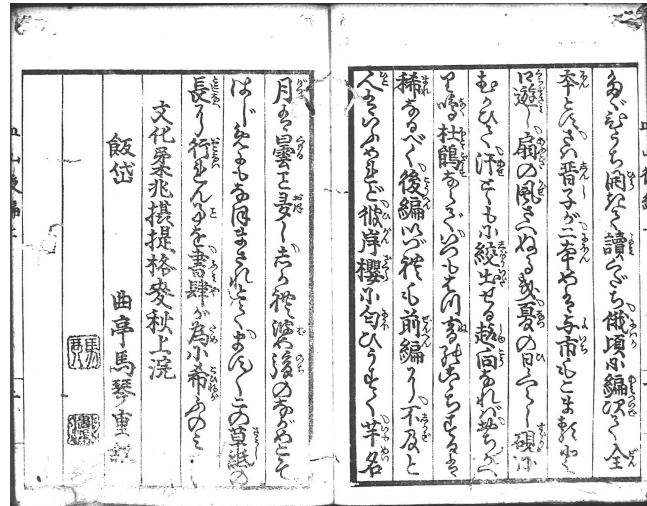
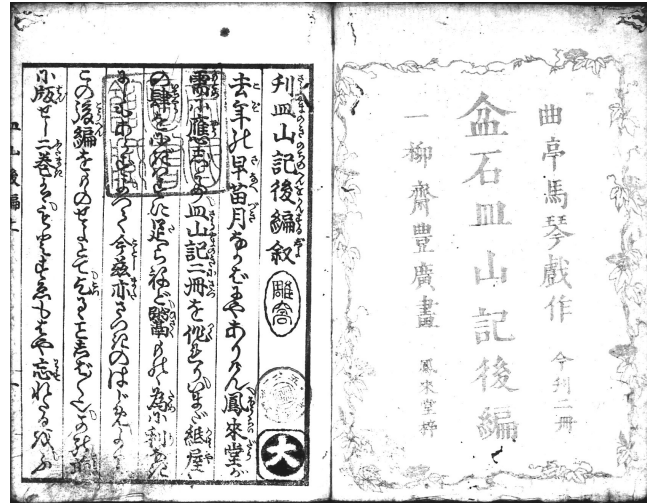


【見返】

曲亭馬琴戲作 今刊二冊

盆石皿山記後編

一柳齋豐廣畫 鳳來堂梓



【叙】

刊皿山記後編叙

鳳窩

去年の早苗月なかばにやありけん、鳳來堂が需に應じて、皿山記二冊を作れり。いまだ紙屋の肆にぎはすに足らねど、需ものゝ為に利なきにしもあらず、よつて今茲亦きつきのはじめより、この後編をものせよとて、乞ふることしばし也。かの前に版せし二巻は、もとすゑもはや忘れたるを、ふたゝびうち開きて讀くだち、俄頃に編次て全奉とす。さハ晋子が、二奉めは与市もこまると口遊し、扇の風さへぬるぎ、夏の日くらし硯にむかひて、汗とゝもに絞出せる趣向なれば、おちかへり

鳴杜鵑なくほととぎすならで、いつもはつ音のこゝちするは稀まれなるべく、後編こうへんいづれも前編ぜんへんに、不及しかずと人ひとはいふめ
れど、彼岸櫻ひがんざくらに匂ひうすく、芋名いもめい「月1 げつは曇くもること尋おほし。しかれ婆後のながめこそ、はじめにもなほま
されとて、ますくこの草紙さうしの長とこしなへに行れん事を、書肆ふみやが為ために希こひねがふのみ

文化柔兆撰提格麥秋上浣

飯岱 曲亭馬琴重叙

琴馬 著作堂

〈後編目録〉

後編目録

第六 疊乃皮衾
第七 大澤の闇撃
第八 因果の錨
第九 熊野路の露
第十 忠孝の世栄
通計五箇條目録畢

後編目録

第六 疊の皮衾
第七 大澤の闇撃
第八 因果の錨
第九 熊野路の露
第十 忠孝の世栄
通計五箇條目録畢

通計五箇條目録畢

木村三重之介勇藏



児さくら
手折らば人の
肩車

木村三重之介勇藏

児さくら 手折らば人の肩車

〈口絵第一図〉

口絵第二図



紅皿

鍋の尻かくまで雪にとし暮ぬ」³

鹿の角まづうら枯のすがたかな

通紅寂靈和尚

口絵第三図



皿山鉄山

寐ぬ門へおふむかへしの暑かな」⁴

錦着て立り故郷の焔のやま

缺皿 重出

口絵第四図

【再識】

前編二冊に述るところハ。木村源七が傳錦織郡司が事。晩稻落穂兩婦の善惡紅血缺皿姉妹の邪正。廣岡兵衛が側隱。赤松義則の仁慈。奴隸勇藏。三重之介と稱す。が誠忠。鹽垂山蠻鹿の奇談。皿屋敷古井の縁故等是なり。それより以下。今亦こゝに記せり。いまだ前編を讀ざる人ハ。かならずまづ彼二冊を閱し。しかしてこの後編をよみたもふべし。文辭のいやしきハ。原振子の為にして。前自叙に説が如し。且寸楮の冊子風情を盡すことあたはず。されど長くてくしくものせんにハ勝る事もあらんかと也。」⁵



盆石皿山記後編上

曲亭主人述

第六 疊の皮袍

赤松上總介義則ハ。勇藏缺皿が忠義によつて。輒く疊の妖怪を退治し。廣岡兵衛が為に冤屈を解て。

その一家恙なき事を得たりしかバ。ふかく賞美あつて。彼等がねがひに任せられ。木村源七が在処を求めぐれる路費として。金百両を給はり。志を遂たらんにハ。速に立かへりて。奉公すべきよしを仰らる。さる程に勇藏ハ。缺皿と、もに行装を整へ。赤松殿に御禮をまうし。兵衛夫婦に別を告て。ゆくへも定めず。首途せり。これみな彼等が忠孝の天助によつて。主従一時に面目を施とハいへど。もし義則寛仁大度の良將に坐さずハ。有がたかるべき僥倖なり。こゝをもて廣岡兵衛献じける。この裨ひろき事半席にあまり。毛も又柔にして蚤を退。居こゝろ寔に比なかりし程に赤松殿ふかく愛よろこび。常住坐臥にはなち給ふことなし。頃しも文月上旬のことなるに。義則件の裨を端ちかう布せて。庭の秋草をながめ給ふに。夕月も限なく出て。ひよろ／＼と白露の秋。の葉ずゑに登れるなど。又一しほの風情なれば。漫に坐をたちて。飛石つたひに彼此を徜徉し給へり。この時義則の嫡子佐用丸とまうして。年才五ツになり給ふが。跡に居かはりて。



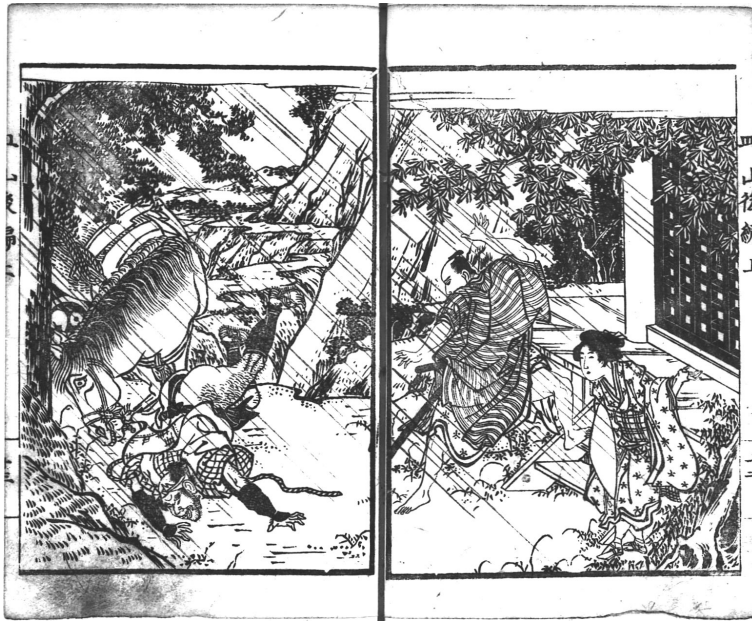
彼裨に坐し給ひぬ。浩処に今までよく晴たる天。俄頃に結陰。風さつとよろし来る程こそあれ。裨の四隅おのづから巻かへりて。佐用丸を中に包み。虚空遙に飛揚して。往方もしらずなりければ。赤松殿ハさら也。傳の老黨。乳母女の童など。駭きさわぎて。弓矢難刀を携。其処こゝかと罵あひ。只顧に散動けども。雲居に閃き登れるを。いかにもすべき。〔挿絵第一図〕「やうなし。遮莫落るところを見究よとて。城中城外野山のきらひなく。通宵索めぐれども。それかとおもふものも見えず。なほ海陸となく。詰朝よ

り追人をかけらるゝに。日ハ徒にたちゆくのみにて。絶てその信も聞えざりし程に。義則ますゝ憤に堪ず。安からぬ事かな。悪獸いかばかり神通を得たればとて。死して僅に甞たる。只一枚の皮に。わが子を取られし事。室町殿ハ勿論。隣國の諸侯に聞れんも面ぶせなり。こハ武運にも竭しかとて。日毎に齒を切り。蒼天をうち仰ぎて。罵り給ふぞ理なる。ましてや義則の奥方ハ。哀傷に袖さへ乾かず。泣あかし泣くらし。あらふる神。佛に祈願して。今一たび佐用丸にあはせ給へとかこち給ひぬ。かゝりし程に廣岡兵衛ハ。此度の殃。みなわが身ひとつの悞也と思へバ。いと影護て。ふかく引籠居たりしが。つらく縁故を考るに。彼輩飲までしうねくして。死後なほ祟をなせし事。唐山にもさる例あり。太古大人の女兒馬皮に巻れて樹の又に掛り。女兒と馬ともろともに。蠶と化けるよしを。搜神記に載たりしに。われこゝに心つかずして。國守に禍をうつしながら。安然として居るべき謂なしと思ひ定め。驢て赤松家の老鷹。狢野鞆履につきて申けるハ。佐用丸ゆくへなくなり給ひし事。兵衛が過なり。させる。咎ハ蒙らねど。その罪ハみづからしれり。しかれば立地に腹かき切りて。罪を償ひ奉るべし。とハ思ひながら。兵衛が死したりとて。若君のかへり給ふにもあらず。只ねかはくハわが首をしばしわが軀にあづけられ。身の暇を給はらんハ。高麗唐土の果までも索めぐり。不幸にして落命あるとも。骨を拾ひて立かへり候べし。申ところ偽らざる証据にハ。女房小船を人質として。残しおくべきにて候。あはれよきに執し給はれかしとて。餘義なきさまに申出しかバ。義則聞食て。今度の殃ハ。彼が越度にもあらず。事のこゝに及べるハ。天なり命なり。われ頃日夥の士卒を走らせ。普く索めぐら。せても。なは便を得ざるものを。彼弥勇に思ふとも。いとおぼつかなき事也かし。しかハあれ。兵衛ハ日来義に勇むもの也と聞り。もし聴ずハ可惜丈夫を死さん坎。ともかくも彼がいふ隨になさせよと仰ける。兵衛ハ舌を養て大に飲び。内室小船にハ老たる奴婢をつけおきて。山脇に残しとゞめその身ハ團吉といふ下郎一人を従へ。大和河内にハ深山も多けれバ。まづこの兩國を索ばやとて。既に長旅の用意をしつ。遂に播州を發足せり。是ハさておき紅血ハ。三年已前に故郷を追放せられ。美作播磨のうちに足をとゞむる事を許されねバ。彼此を呻吟て。遂に津國より大和路へ迷ひ出で。待乳越にかゝりける日。畠田のこなたより。戻馬率つゝ。旅人まちがほなる馬士。彼がひとりゆくを見て。こハ欠落もの也と思ひしかバ。後になり先にたち。仮初にもいいかけて。さまぐに勸慰め。御身が疲勞たる形容を見るに。いと痛まし。わが馬に

乗り給へ。家に伴ひて今宵ハあるじせんといふ。しかれども紅皿ハはやくその心を猜し。よきに回答
 てとりあはず。彼をやり過さんと思ひて立在ハ。馬士も亦停立。走れバ人も馬ももろともに走り來る
 にぞ。いよく思ひ悩る折しも。一驟雨のきとふりて。忽地盆を覆すがごとくな¹⁰るに。馬士ハ
 ふためきて。荷鞍に結びつけたる笠をとらんとするに。あやにくに風にあふられて。頓にハ紐の解
 やらず。紅皿ハすハこの隙にとて。路四五町走り抜にけれど。雨ハますく降る程に濡たる衣の手足
 にまつはり。路又いたく滑りて思ふまゝにハ走り得ず。と見れば路傍なる大榎の下に。山神の禿倉か
 とおぼしきがありければ。この軒下にかくろひて。しばし晴間をまつ程もあらせず。彼馬士ハ漬淖に
 なりて追ひ來たり。馬をバ榎に繋留つ。紅皿が襟上觸て引ずり出し。這奴甚ものをしらず。われ
 ハ慈眼をもて。汝がひとりゆくを憐み。わが馬に乘坐¹¹てわが家に伴んといふを。あしう聞バこ
 そ。逃も躲もすれ。その義ならバすべきやうありと罵り。やがて紅皿に手拭はませ。わりなく馬に搔
 き乗せんとする処に。思ひもかけず禿倉の裡より。三十餘歳の武士。扉をさと押開て走り出。矢庭に

馬士が肘をとつて撲地と投つくれバ。

こハ朽をしとて起んとするを。刀の
 脊もてりうりうと打すえ。此奴憎べ
 し。伴のなき女子と侮りて。かく理不盡
 なる所行をなすハ。勾引さんとの計較
 なるべし。この街道にて。おり／＼
 さる癖者ありと聞つるが。わが眼にか
 かりてハ許がたし。観念せよといひ
 もあへず。ふたゝび刀をふり揚れば。
 馬士ハ噫と叫び¹¹て見かへるに。この
 人ハ是。二見と上野の間なる。犬飼の郷
 にて。錦織卯三三と呼ぶ。劍法の師匠
 なれば。驚き怕れて返答にも及ばず。馬
 を捨おきて逃去りけり。卯三三ハ遙に



目送りて。から／＼とうち笑ひ。さて紅皿に對ていふやう。汝が為俸此わたりのものとおぼえず。いかなる故ありて。遠く迷ひ來るぞと問バ。紅皿答て。わらはは作州皿山なるものなるが。いかなる故ともしらず。親族俄頃罪せられて。悉く死亡。わが身ハ國の境を追れて。寔によるべきまゝに。そこはかとなく呻吟て。この処まで來たりしに。彼馬士情を見せて。家に「挿絵第二圖」¹² 伴んといふ。こハ誠の心もてしかいふにハあらず。賺こしらへて妓院などに賣らんとする底意なりとおもひしかバ。むら雨の降出たるを幸にして。只顧に走り抜んといたせしに。躲れ果さずして既に難義におよびしを。かく救ひ給はる事。再生の恩いつの世にか忘れ侍らんといふ。卯三二点頭て。さもこそあらめ。われ此禿倉に走り入りて。雨やどりせずハ。汝ハかならず活地獄へ墮さるべし。美作ハわが故國なるに。彼処の人ときけバいと見すつるに忍がたしわが家に來れ。よきに養ひ得させんといふに。紅皿ハ暗き夜に月の光を見るこゝちしつ。伴れて犬飼に到りぬ。抑この錦織卯三二ハ。美¹³ 作國二宮村の郷士錦織郡司が甥也。いと弱年より義氣ある男にて。一たび郡司に養れ。その家を嗣べき人なりしに。養父郡司罪ありて。世帯を没収せらるべしと聞えたるころ。その過をわが身に引稟。みづから罪せられんことを申出にけれバ。郡司もいと便なく思ひて。夥の金錢を惜まず。彼が為に命乞せし程にやうやく死刑を脱れて。故郷を追放さる。しかりしより卯三二は些の由縁をもとめ。大和の犬飼に來りて。做ひ得たる釧法を指南し。こゝにあること十五六年に及びしかバ。里人等敬ひて。他事なくもてなし。媒するものありて。久米氏の女を娶り。市平といふ。奴隸一人をめしつかひて。富にハあらねど。世をわたるに易し。さても卯三二ハ。その日紅皿を伴ひかへりて。妻にも彼がうへをものがたり。なほよく素生を問に。たえて久しく音耗なき。作州の伯父錦織郡司が名迹を相續したりける。源七といふものゝ女兒也と申にぞ。此母子が邪なりしをしらねバ。夫婦いよ／＼憐みて。是より下女として叮嚀に養ひ。はやく三年の月日經て。紅皿既に十六歳になりぬ。しかるに今茲春のなかばより。卯三二が妻風のこゝちとて打臥たるに。藥餌も驗なくて。次才によはりゆくばかりなれバ。紅皿ハ竊に歡び。あはれこの人いかにもなり」¹⁴ 給へかし。われその跡へおしなほりて。世を安く送るべきにと思ひながら。さらに色にも顯さず。昼夜看病していと信やかにもてなしける。心の中こそおそろしけれ。かくハ如月のすゑに至りて。卯三二が妻遂にむなしうなりにけり。七々の追善かたのごとく営つ。去者ハ日々に疎なりゆくが世のならひなれ

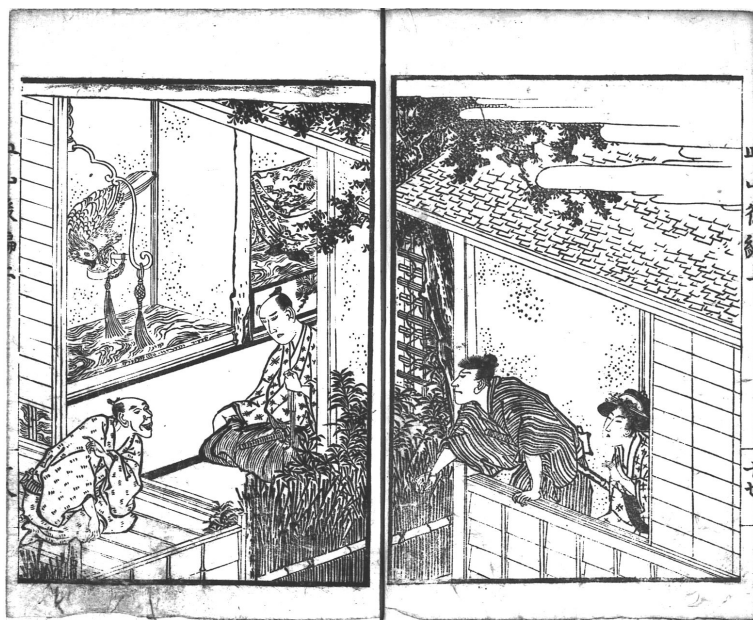
バ。卯三二も独寐の枕さみしさに。紅皿を妾とせり。彼女子究て淫婦なるに。世才人に勝れたれば。只顧媚であるじの心に稱やうに挙止ほども。卯三二もいつしかこゝちまどひて。後妻にもせまほしく思へども。われにハいたく年才の劣りしをもて。黙止せしとぞ。されど何事も卒妻に異なることなく。よろづ家事をうち任せける。

第七

おほさは やみうち
大澤の闇撃

こゝに亦久米鉄平といふものありけり。これハ卯三二が妻の従弟にて。ちかきほとりに住居せしが。いとはやくより孤となり。年既に廿五才に及べり。彼内縁のものなれば。卯三二も年来釵法射藝を教へ。三年あまり前に浴へ上して。奉公を持せけれども。万能の勝れたるも一心の正しきに不及。器量骨柄ハ人なみに超たれど。その行ひよからずして。彼此を漂泊し。遂に身の¹⁵ よるべなさに。このころ大飼へかへり來にけれハ。卯三二彼が放蕩を怒るといへども。妻の世を去りて程もあらぬに。その従弟なるものを追ひうしなはす。なき人もさこそ心憂かるべけれどと思ひかへし。さま／＼教訓して養ひおきぬ。しかるに紅皿ハ。卯三二が声色に泥まで。門人の許より得たりける。舶來の鶴鵲を寵愛し。又武稽指南の暇ある日ハ。山獬して。朝より夕まで。家にある事稀なれば。いたくうらみて疎しうおもふ折しも。鉄平が年もわかつて。よろづ風流たるに。三とせが程に見なれたる。都の手ぶりさへ。こゝの里人に似るべうもあらねバ。密に目をもて思ひを「運せしかバ。鉄平元來色このみなるに。紅皿が姝きにこゝろを動して。膽ふとくも恩ある人の傍妻と密通し。をり／＼あるじが留守を窺て相語を。卯三二は更にしらず。その年の八月上旬。雨の日のつれ／＼なるまゝに。ひとりもたれ柱によりて。孫氏が兵書を讀つ。不圖柱に掛たる簾の中に。鸚鵡の囀を聞けバ。紅皿と鉄平が。密言を口真似す。こハあやしとて。なほ耳を側だて。聞に。疑ふべうもあらぬ。彼二人が密會日の相語なり。ものに驚き軼掌ざる卯三二も。怒り心頭に發りて。直にうちも果すべう思ひしが。や。胸を押鎮め。まづあたりを見る」¹⁶ に。紅皿ハ脊門の板間の雨漏をとめんとて。鉄平と。も彼処にあり。又厨のかたにハ。奴隸市平が。鹿朶を打こなし居たりけれバ。密に招き。只今かゝる事あり。汝ハ定めてよく縁故をしりてこそあらめ。彼等が不義の為倅を審にしらせよといふ。この市平ハ年五十にあまりて。鈍ものなれど

も。人を憐むの心ふかゝりし程に。はじめハ明白にも告ざるを。知三二いたく責問にぞ。遂に匿
 がたくて。僕も楚と見とめたる事ハあらねど。宣ふごとく。彼二人の景迹にこゝろ得がたき事
 多しといふ。知三二點頭て。われ明日すべきやうあり。汝かならずこの件」〔挿絵第三回〕」¹⁷



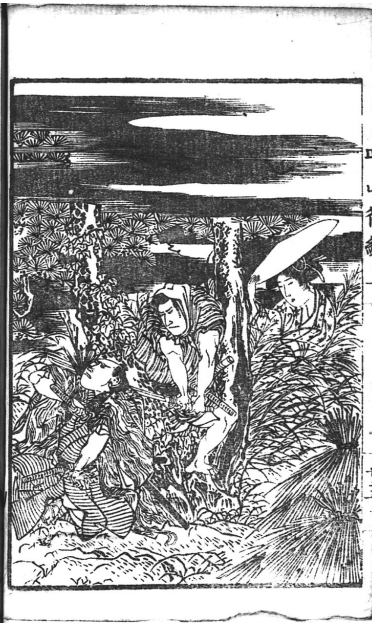
の事を彼等しらせそとて。その口をと
 め。つくづくとおもふやう。世にハ
 怪有なる奴もあるものかな。彼紅皿ハ。
 三年前この國へ呻吟來て。既に悪徒
 の為に勾引されんとしたるを。救ひ
 得させしのみならず。年來あはれみ
 て養ひおき。剩妻の身まかりて後
 ハ。傍妻としてよろづを委ね。又鉄平
 ハ。幼年より武藝を教へ。成長てハ夥の
 路銀を齎し。奉公持の為に洛へ上した
 るに。放蕩にして事を遂ず。路銀ハさら
 也。衣服太刀などきへうしなひて。おめ
 々と立歸れるを。なほ恕して養ひお
 くに。彼もし聊も恩義をしらバ。させ

る志ハ盡さずとも。かゝる畜生」¹⁸ の行ひハすまじきに。形のみ人なみにて。心ハ犬にも劣りた
 るものども也。這奴等が首をならべん事。今宵の中を過ぎと思ひしが。又おもふやう。わが家にて
 これを殺し。人をさわがせんハ恥のうへの恥なり。とかく里遠き山中へ誑引出し。なぶり殺しにし
 てくれんずと。既に思案を定め。さて次の日天も晴ければ。その日の昼過て。紅皿鉄平にいふやう。
 われ今夜大澤へゆきて。虫を聞んとおもへバ。汝等をも伴ふべし。割籠の用意せよといひおきて。
 弓矢携つゝ庭に立出。巻藁射でぞ居たりける。紅皿も鉄平もかゝるべしと思ひもよらず。鮎の
 しら焼に。握飯を割籠に」詰。吸筒蓆やうのもの。すべて携ゆくべきをハ。悉くとりあつむる程
 に。日もやゝ西へ没なんとす。この時奴隸市平ハ。主人知三二が日來劇しき心さまに似ず。彼二人が

不義を曉得ながら。今夜虫間に伴んといふこそ。心にもあるなるべけれ。それをしりつゝ刀の錆となさん事。いたましと思ひしかバ。彼二人をも陰にさし招きて。きのふよりかゝる事あり。もし大澤へゆき給はゞ。大なる禍あるべし。その心して途より逃去給へかしと密語バ兩人聞て驚き呆れ。しばし忙然として居たりしが。佖と思ひかへして。市平に對ひ。よくぞしらせ給ひたる。身におぼえハ」¹⁹ なけれど。機に臨て安全の計をなすべしと回答ける。時に卯三庭より立かへりて。はや時刻になりぬ。誘ゆくべしと。いふ。紅皿ハ市平がものがたりにて。鸚鵡が口さがなくて。わが密叟をあらはしたりと聞てふかく憎み。常のごとくまり餌を飼さまにて。竊にその餌に夥鹽を搗まぜて。筈に入れおき。手ぢかなる金を盗て懷にし。三人もろともに立出けり。彼大澤といふハ。犬飼より遙西北にあたる。山の麓なれば。ゆきもつかざる間に日は既にくれたり。卯三二ハかく謀ぬれど。慮ふかきものなれば。只仮初に。鳥の囀を聞。市平がおぼろけにいひしのにて。みづから認たるにあらねバ。今宵よく不義の證據をあらはしてこそと思ひ。待乳山のこなたを過るとき。鉄平紅皿を見かへりて。われハ石寺へ立よりて。跡よりゆくべきに。汝等ハまづ彼処に到りて。よき木の下に蓆布まはして待候へといひかけて。みづからさきやかなる挑灯をともし。路を横ぎりて。立わかれしかバ。紅皿密に鉄平が袖をひかへて。彼人石寺へ立よるとてわかれしハ。大なる幸なり。とくこの隙につれて退給へ。やよゝといそがせば。鉄平しばし思案して。今吾儕を先へゆけと」²⁰ いふハ。彼人ふかき謀ありとおぼし。もし慙に逃去らんとせば。みづから不義の證據を見せて。いかに侮るともかひあるべからず。夫先ずるときハ人を征す。こゝに及びて何ぞめゝしく逃走らん。われ期に于て計あり。そハかやうく也と私語バ紅皿聞て打おどろき。さすがに心決せざるを。鉄平頻に勸励し。こゝより経をめぐりて直に大澤へハ到らず。却卯三二を遣過して。その後へまはらんと計較ぬ。卯三二ハ密計を市平が漏したるをしらず。彼二人を抜にあゆませんにハ。夜に乗じて淫がはしき挙止をなすべし。そのとき「後よりつけゆきて。彼等が罪を數へ。首打おとすべしと思ひければ。石寺のかたへ引わかれて。途より抜つゝ大澤にゆくに。途にてハ追つかず。やがて彼処に到けるに。年ふる松の木の下に。人影してければ。すハこれならんとて。いよゝゝ潜やかにあゆみよりて見るに。そのものどもにハあらずして。旅人とおぼしき武士の。病臥せるなりしかバ。心忙しき折なれど。さすがにいたましくてうちもおかれず。その國処名氏をたづね。

さま／＼に勦^{いたは}れバ。彼^{かの}旅^{たび}人^{びと}も好意^{こうい}の程^{ほど}をよろこび聞^{きこ}え。さていふやう。われハ播州^{ばんしゅう}山脇^{やまわき}の郷土^{こうど}にて。
「²¹ 廣岡^{ひろおか}兵衛^{ひやうゑ}と呼^よぶもの也^や。人^{ひと}を索^{たづ}ん為^{ため}に。いぬる月故郷^{ふるさと}を旅^{たび}だち。河内^{かわのち}内國^{のくに}を徧^{へん}歴^{れき}して。この大和路^{やまとぢ}
へ出^いる折^{いづ}しも。はからず瘡^{さや}を患^{うれ}ひと惱^{なや}ましくハあれど。事急^{こときう}なる旅^{たび}をすれバ。保養^{ほやう}に違^いあらず。間日^{まび}
にハいつも旅宿^{りょしゆく}をたちて。路^{みち}をゆくこと病^{やま}ざるものに等^{ひと}し。しかるにけふ又間日^{まび}なるをもて。今朝^{けさ}
はやく宿^{しゆく}を出^いで。待乳^{まちちゆ}越^こして紀路^{きのぢ}へ赴^{おもむ}くとせしに。思はずも路^{みち}に迷^{まよ}ひて黄昏^{たふし}に及び。剩^{あまつさへ}寒熱^{かんねつ}頻^{ひん}に發^お
りて。一足^{ひとあし}も歩^{あゆ}みがたく。藥^{くすり}ハ懷中^{くわいちゆう}したれども。咽喉^{のど}かはきて堪^{たへ}がたけれバ。近^{ちか}きほとりに人住^{ひとす}む里^{さと}
やあるとて。一人^{ひとり}の従者^{じゆうしや}を見^みせにつかはせしが。いまだ歸^{かへ}らず。日は既^{すで}に暮^{くれ}」てかゝる仕合^{しあはせ}也とい
ふ。卯三^{うさふじ}ハ縁由^{えんよし}を聞^きてふかく痛^{いた}しみ。心^{こころ}の中に思^{おも}ふやう。われ縦^{たとひ}今宵^{こよひ}紅皿^{べにざら}鉄平^{てつへい}を助^{たす}けんと。この
旅人^{たびびと}を救^{すく}はずは。人たるものゝ心にあらず。彼等^{かれら}が事^{こと}ハ後^{のち}にしてまづこの人^{ひと}を勦^{いた}得^えさせんにハと
思^{おも}ひて。いよく信^{まめ}やかにもてなし。不知^{ふち}案内^{あんない}の深山^{みやま}辺^へにて劇^{はげ}しき病^{やまひ}の發^おり給^{たま}へバ。さそな心くるし
くおぼすらめ。此^こわたりハすべて九折^{つゝまわり}にて。路^{みち}もさだかならねバ。従人^{じゆうじん}をつかはし給^{たま}ふとも。輒^{たち}く人
の家^{いへ}に索^{たづ}ねかるべうもあらず。われハ犬飼^{いぬかひ}といふ處^{ところ}に久^{ひさ}しく住居^{すまゐ}する武士^{ぶし}の浪人^{らうじん}。錦織^{にしきう}卯三^{うさふじ}とい
ふもの也^や。しばし待^{まち}給^{たま}へ。われゆきて一挺^{いつてい}の輻^かを備^{やと}ひ。御身^{おんみ}を乗^のせて家^{いへ}に伴^{ともな}ひ。一夜^{ひとよ}のあるじいたす
べし。こゝろ」²² づよくおぼせとて。叮嚀^{ねんねい}に聞^{きこ}えおき。もてる挑灯^{ちやうてん}をバ兵衛^{ひやうゑ}が頭^{かしら}の上にさし出^でたる。松^{まつ}
が枝^えに結^{むす}びさげ。熟^{なれ}し路^{みち}なれバ闇^{くら}きを厭^{いと}まず。人家^{じんか}あるかたへ走^{はし}りゆくにぞ。兵衛^{ひやうゑ}ハ只顧^{ひたすら}その志^{こころざし}をよ
ろこびつゝ。なほ舊^{もと}の處^{ところ}に打^{うち}ふしたるに。且^{しばう}して熱氣^{ねつき}も少しさめたりしかバ。松^{まつ}の幹^{みき}へ手^てをかけて。
やをら立^{たち}あがる折^せしもあれ。久米^{くめ}鉄平^{てつへい}ハ紅皿^{べにざら}を將^あて経^{こみち}よりこゝに來^{きた}り。彼挑灯^{かのちやうてん}を目^め當^{あた}にて。是^{これ}なん
卯三^{うさふじ}なりとおもひしかバ。途^{みち}にて用意^{ようい}せし手矛^{てほこ}を閃^{ひらめ}かし。声^{こゑ}をまかけず廣岡^{ひろおか}兵衛^{ひやうゑ}が。馬手^{めて}の膳^{わきざら}へ
ぐさと刺^{さし}。穂先^{ほさき}四五寸^{つぎい}衝^{つき}出^だせバ。こゝろえたりと拔^ぬきはし。矛^{ほこ}の真中^{ただなか}切折^{きり}たり。鉄平^{てつへい}すか」さず刀^{かたな}を
引拔^{ひきぬ}き。たゞみかけて切^きるほどに。兵衛^{ひやうゑ}ハこゝろ勇^{たけ}しいへども。病^{やま}たるうへに不意^{ふい}をうたれ。數^すヶ所^{かしよ}の
深手^{ふかで}によはり果^{はて}。礮^{たふ}と倒^{たふ}れて死^ししたりける。鉄平^{てつへい}ハ既^{すで}に為^し課^{しおほ}て刀^{かたな}の血^ちを押拭^{おしぬぐ}ひ。彼挑灯^{かのちやうてん}をとつて屍^{しかがい}
を見るに。卯三^{うさふじ}にハあらずして。見もなれぬ旅人^{たびびと}なれバ。紅皿^{べにざら}と顔^{かほ}うち見^みあはし。呆^{あきれ}て立^{たつ}たる後^{うしろ}方^{のかた}
より。忽^{たちまち}地人^{まちひと}の來^くる音^{おと}すれバ。こなたの挑灯^{ちやうてん}うち滅^けしつゝ。さゞやきあふて逃^{にげ}去^{さり}り。さる程^{ほど}に兵衛^{ひやうゑ}
が従者^{じゆうしや}團吉^{だんきち}ハ。彼此^{そちち}となく索^{たづ}ねありきしに。近^{ちか}きほとりにハ宿^{やど}かるべき家^{いへ}もあらず。主君^{しゅくん}の事^{こと}いと心
もとなさに。又舊^{もと}の路^{みち}に立^{たち}かへれバ。思^{おも}ひもかけず主^{しゅ}の兵衛^{ひやうゑ}は。段々^{ずだ}に」²³ 切^きふせられ。血^ちに塗^ぬれて

死したれば。おどろき「あはて」睨にらて抱いだき起おこし。呼び活いれどもそのかひなく。あまりに浅あさましくてせんすべをしらず。かゝる処ところに錦織にしりうき卯三うさふじハ。待乳茶屋まつちちやのほとりにて轎かこを借出かりいたし蕉火たいまつふりてらしいていそがし来るを。團吉だんきちハ木間このまにありてつらく見るに。主しゆうの屍しかいの傍かたはらに捨すておけりし挑灯ちやうちんのしるしと。只今ただいま前にすえて来る武士ぶしの衣服いふくの紋もんと。つゆ違たがはさりければ。これ疑うたがふべうもあらぬ主しゆうの仇人かたきなりおのれハ下郎げらうなりといへども。當たうの敵てきやハ脱のがさじとて。いよく身を潜ひそめて閑居はなひるともしらず。卯三うさふじハ遙はるかに声をかけて。いかに旅人たびん。轎かこを扛かせて來きたれり。いざ乗り給のりたまへといひつゝ、近くよるを。團吉だんきちハせきせきにせいてそのいふ処ところをも聞きとめず。木蔭こかげより跳とんで出いで。やと声こゑかけて切きつくるを。卯三うさふじ身をひねりて刀かたなの鐔元つばもとしかと取り。こハ狼藉ろうぜきなり。何なにの遺恨いこんありて。だまし討うちにハするぞといはせもあへず。團吉だんきち声を高たかして。卑怯ひきやうなり。この期ごに及および。脱のがれんとすると。いかでか脱のがさん。われハ汝なんぢに撃うれたる。播磨はりまの旅人たびん。廣岡兵衛ひろおかひやうゑが奴隸しもべに。團吉だんと呼よぶものなり。わが主病しゆやまひを推おして紀路きのぢへ赴おもむかんとしするに。こゝに來きたつて病劇やまひげしく見みえつれば。湯ゆを乞こひ。宿やどをもとめんとて。我われハ彼此そちちを走はしりめぐり。今立いまたちかへるに思おもひもかけず。主しゆうをうたせて仇人かたきだにしらざれば。いと朽くちをししく思おもひつるに。潜ひそに汝なんぢが衣服いふくの紋もんを見みれば。主しゆうの屍しかいのほとりに」²⁴ 捨すてある挑灯ちやうちんの識しと是



おなじ。思おもふに汝支黨なんぢいしどうを相語かたがひ來きて。この屍しかいを扛かもてゆかせ。埋うめ藏かくさんとするにこそ。既すでに發覺あらはるゝからハ汝なんぢも壯夫ますうそ也。只ただ潔いさぎよく名告なりのりあひて。勝負せうぶを決けつせよと叫さけびつゝ。もぎはなして切きらんとす。卯三うさふじハこれを聞きてますゝ怪あやしみ。かい觸ふたる手てをゆるめず。馬手めてに蕉火たいまつをあげて。彼旅人かのたびんを見るに。鮮血ちしほながれわたり。肢体みうちハつゞける処ところもあらねバ。駭然がいぜんとして大おほに驚おどろき。丁ちやうと飛退とひのきつゝ、

両刀を投出し。こやはやまるべからず。われ實に兵衛殿とやらんを殺さず。つく／＼と縁故を考るに。わが機密はやく漏れ。鉄平がこの人を。われなりと思ひ悞りて。かく刃傷に及べるなるべし。こハ一夕に説盡すべう」〔挿絵第四図〕²⁵ もあらず。もろともわが家に來候へ。おのづから其許の疑ひ解なんといふに。團吉ハなほ心をゆるさず。されど両刀を投遞して。赤き心を示すうへハ。理不盡に討果がたくて。しばし憤を忍て黙止しけり。さて卯三二ハ。兵衛が屍を轎に打乗せさせて。團吉を誘引。遂にわが家に立かへりて。二人の轎夫をバ歸し。まづ團吉に。鉄平紅皿が一件の事を物がたり。彼等不義あるによつて。今宵大澤へ誑引ゆきて。首を刎んと思ひし事。又兵衛がみちに病臥たるを見て。痛しさに。扶掖て家に伴んと思ひ。待乳茶屋のほとりに走りゆき。轎を借出して立かへるに。あへなく。兵²⁶衛が撃れしハ。彼鉄平。わが松が枝に結びおきたる挑灯を見て。われ也と思ひ悞りて。彼人を殺し。紅皿を將て逐電せしならんと思ふ事など。くはしく説しらせ。さるにても鉄平が。はやくわが機密を曉りたる事いと不審しとて。やがて市平を呼出し。汝口さがなくて。きのふ鸚鵡の囀につきて。わが問し事を。彼二人にしらせたりとおぼし。とく明白にいへ。いはずハすべきやうありと責問にぞ。市平ハ人を助んと思ひて。却て殃を醸せしかバ。大に當迷して脱るゝに言葉なく。宣ぶごとくきのふ問せ給ひし事を。彼人たちに私語候ひしといふ。この時卯三二ハふたゝび團吉に對ひ。聞せつるごとく。兵衛殿をうちたるものハ我ならず。今ハ疑念もはれたるべし。まづ件の事を縣主へ訴聞え。其許ともろともに播州へ赴きて。彼人の親族を伴ひ。鉄平紅皿を索めぐりて。終にハ這奴等を捕て仇を報せ。わが曇なき心の程をもしらすべく思ふなり。抑廣岡氏ハ。何の故ありて重病をも厭ず。慌しげに旅をバし給ひしと問に。團吉ハ兵衛が佐用丸を索に出たる縁故を審に物がたれば。卯三二ますく嘆息し。かゝれば其許の主君ハ義士なり。われその妻子に力を戮せ。彼人の志を継せずハあるべからずと憤激せり。さて天ハ明にけれど。思ふに違はで紅皿鉄平ハかへらず。鸚鵡も笈の中に²⁷死したれば。これさへ彼等が所為かと思ふに。いよく怒に堪ず。すなはち縣主に縁由を訴。兵衛が屍をバ一片煙となして。白骨を壺に蔵め。これを團吉が項にかけさせ。家をバ人に与へて帰らざる心を示し市平を將て三人もろともに播州に赴きしが。次の日人迹稀なる曠野を過る時。卯三二ハ市平を見かへりて。汝下郎とはいひながら。口さがなくて。わが機密を。鉄平にもらせしより。思ひもかけず廣岡氏に殃せり。われ今汝が首を刎て家裏とし。彼家に贈

らんと思ふ也。とくにも殺すべかりしに。人をさわがせじとて。こゝまでハ召つれたり。みづから思ひしるべしといひもあへず。首宙に打おとし。是を「携て播磨に到り。國守赤松殿に一件の事を申述さて兵衛が家に到りて。小船に對面し。兵衛が枉死。わがうへ。鉄平。紅皿が事を。審に説らせ。これその殞の原なれハ。誅し了れりとて。市平が首をとり出てさし示せば。團吉ハ項にかけたる主の白骨をとりおろし。大澤へ到るまで。路すがらの事を申し。小船は夫があへなき死をかなしみ。見しにハかはる白骨の壺かき抱きて轉輾。哀傷大かたならざりける。その時卯三二ハ。小船を諫勵し。悲歎理ならずとハ思はねど。いかに歎き給ふとも。死したる人の再び活べきにあらず。それがし不才なれども。武藝を」²⁸ もつて人の師たるもの也。御身に助太刀して鉄平を撃ざる間ハ。わが身を潔とするに足らず。その心ぐるしさハ。この一家の人に異なる事なし。とく／＼涙をとめて事を議し給へと勧めバ。小船もこれに励されて。形をあらため。御身のうへを聞侍るに。原ハ美作國二宮村の郷士。錦織郡司の甥にて。前國守のとき故ありて。故郷を立退給ひしとか。かゝれば缺皿が父源七とも。相語バ由縁ある人ぞかし。又紅皿と宣はするハ。缺皿が妹の事にて侍るべし。わが方にも如此ぐの事ありとて。木村源七が錦織氏の名迹相續せし事より。晩稲落穂が事。缺皿紅皿勇藏等が事」すべて一圈子の首尾を物がたり。もし勇藏缺皿があらんにハ。心づよくも思ふべきに。彼等ハ父の往方をしらん為に。遠く旅だちて思ふにかひなし。又缺皿が妹たる紅皿が不義より事起つて。わが夫枉死せしハ寔に脱がたき惡因縁に侍るべし。宣ふに任せて。助太刀をたのみまいらすべけれども。御身もわらははもいまだ老くだちたる身にもあらず。世の人になき名をたてられんもいと朽をし。志の厚きところハ。よろこぶにあまりあれど。この事のみはうけ引かたし。といふ。卯三三聞て。この事。悉く理り也。しかハあれど。御身ハ仇人鉄平を認らず。われ又佐用丸を認らず。とかく」²⁹ もろともに諸國を編歴し。さきに仇人にあはず。われ助太刀して討せ。又佐用丸のゆくへをしらバ。御身護かへりて國守に進らせ。事而ながら夫の志を継給へ。且紅皿ハわが伯父錦織郡司が名跡たる。源七とやらんが女兒にて。故郷を追放されたるもの也と。聞るは今がはじめにて。いよく憎べき毒婦ぞかし。もしわが淫心を發さんかと疑ひ給ふも。遠慮のいたす所なりとハいひながら。われも是一個の丈夫也。かゝる事には聊も苦しみ給ふべからずといひをはり。床にかけたる鎗籠より。矢二條を拔出し。天地を拜して盟をなし。彼矢を押折て見せければ。

小船も」このうへハとて。赤松殿に卯三二が申旨と。わが思ふ程をも申述て。仇討の事をねがひ奉り。且夫兵衛が志を継て。佐用丸の御行方をも。索まゐらせたき趣を申せしかバ。赤松殿許容あつて。洛へも聞えあげ。さて敵討免許の御教書に。引出物夥とり添て。餞別し給ふにぞ。小船はいふもさら也。卯三二もふかく歎び。旅の用意をいそがしけり。さる程に小船ハ。奴婢に身の暇をとらせ。奴隷團吉のみ。志信やかなるものなれば。今度も彼を俱して卯三二と。もに首途し。夫の仇人をぞ索ける。抑廣岡兵衛。往に疊の崇に係りて。冤枉に陥ける」を。彼勇藏が忠義によつて。一トたび汚名を雪つるに。既に勇藏缺皿が。遠くこの地を離るゝに及びて。怨灵ふたゝび殃し。一家を殲すに至る。正に是前世の惡業。皿を碎かバ殺さんと先祖より定たるを。兵衛が時に改るといへども。久しく徳を傷し。因果ハこゝに脱得ず。紅皿が事より起りて。その身はからずも鉄平が為に殺さる。しかハあれ兵衛が陰徳。終に空しからずして。缺皿勇藏もろともに。久後絶たる主家を興す。これ他なし。皿によつて家を滅し。皿によつて榮をなす。先祖の惡政兵衛が陰徳。その報ある事。すべてかくの如し。嗚呼誰かおそれざらん。嗚呼誰か慎ざらんや。

盆石皿山記後編上果」³¹

盆石皿山記後編下

曲亭主人述

第八 因果の鑑

久米鉄平ハ。大澤にて卯三二也と思ひあやまり。見も馴ぬ旅人を切害しておどろき。紅皿を將て。山越に紀路へ逃去り。名手の里に僑居してふかく躲れ。なす事もなくて徒に月日を送れハ。紅皿が竊もて來たりし金も。早晚遣ひ果して。朝夕の煙だに立かね。些の助力を乞んと思ふにも。馴染なき里はそれも相語がたくて。隱慮の報ひかゝるべき事ながら。紅皿ハ鉄平をうらみ。鉄平ハ紅皿を罵り。日にくものあらがひのみし」て。こゝに半年あまりを経て。年も暮れ春立かへりて。世ハ豊なれども。いよく飢渴に迫りしかバ。鉄平つくづく思ふやう。何としいだしたる事もなくて。女子を抱へ。うかくとこゝにあらバ。もろともに餓死するの外ハあるべからず。とかく紅皿を妓院に

○ケルワ

賣て。その身價にて衣服太刀などをとゝのへ。よき主どりして今の貧苦を忘れんものと。既に心を決しながら。もしこの事を明白に告んにハ。彼婦ますゝ恨罵りて。従ふべうもおぼえず。彼にハしかるべき武家などへ。給事に出すと偽り。故なく送り遣るにハしかじと思案し。ある夜紅皿に如¹此²の物がたりすれば。はじめの程ハ更にうけ引氣色なかりしが。紅皿もこの男の分際にて。われを安らかに養ふことハあたはじ。かゝる愚者にかゝづらひて。生涯を過たんハ。大なる損なり。まづ且く奉公して身のまはりを拵へ。別に男を見たてゝ。久後の事をはかるべしと思ひかへし。ともかくもと應ければ。鉄平ふかく飲びて。しからバわれハ一兩日走りめぐり。人をたのみて御身を遣るべき方を聞定むべしとて。詰朝家をたち出。潜に津國乳守の妓院へ赴きける。かくてその夕宿とり後し。五七人の高野道者鉄平が門方に立在て。こゝに歇らん。彼処へ行んとて。かしがまし「う散動を。紅皿呼び入れて眞實に待し。さていふやう。こゝハ旅籠屋に侍らねバ。夜具の用意もせず。又進らすべき飯もなし。齋し給ふ米あらバ出し給へ。炊侍るべしといふ。道者ども聞て。吾儕ハ木賃のみにて宿かるなれば。枕にあらバ事足なん。又米ハ手に携來れり。今通与す三分一を夜食とし。残りハ翌の朝飯と。昼食の為に割籠へ詰めてゆくなり。その心して給はれと聞えつゝ。舂を借りておのゝ袋の米をはかり出し。これを紅皿に通与しければ。紅皿ハ是ほどの米を手に入るゝ事ハ。たえて久しくあら²ざれば。忙しくも立て。その三分一を炊き。おのれまづ飽まで食ひて。道者のほとりに飯櫃をさし出し。こゝろの隨にたうべ給へといふ。かくて道者ハ夜餐食をはり。木の切株などとり集めたるを枕とし。挟き一室に押おふて睡けり。紅皿ハこの夜鉄平が帰らざるを疑ひ思ひながら。おのが臥房に入り。さて未明に起てふたゝび炊くとき。潜にその米をわかちとりて。桶にかくし入れ。やゝ焚おろして道者を呼覚せバ。道者ハもろともに起出て嗽ぎ。朝飯を食はりて。残れるを割籠へ詰るに。三人が程足らざ³れハふかく怪み。日來いづ地に歇ても。かくまで飯の不足せし事ハなし。ゆふべの飯も常よりハ食足らざりしに。けふの昼食に宛たるが。夥足らざるハ不審こと也といふを。紅皿聞もあへず。われハ通与給ひしまゝに炊たり。これハ客人たちの量あやまり給ふなるべし。よくも思ひめぐらさで。人を疑ひ給ふなと咥ぎ。頬のあたりふくよかにして答ける。道者ども言を齊し。こハ心も得ぬ。三度の食を二人六合づゝ量出して。七人がうへにて六七四舂五合通与せしを。御身もよく見てこそ居たるらめ。しかるに夜餐の不足せしより。今朝に至

り」³てハ。凡^{およ}一^{いつ}舛^さあまりも盗^{ぬす}れたりとおぼし。われくハなみの旅^{たび}人^{ひと}にもあらず。高野^{こうや}大師^{だいし}へ参^{まゐ}るものなるに。かく後^{うしろ}ぐらき事^{こと}をなすハ。冥利^{みやうり}に盡^{つき}たる婦^{をんな}かなと罵^{のの}れバ。紅皿^{べにざら}も大^いに怒^{いか}り。身^みにおぼえなき事をいひかけられてハ立^{たち}がたし。家^{いへ}にハ夫^{をとこ}あり村^{むら}にハ長^{おさ}あり。いかに貧^{まい}くハ暮^{くら}すとも。僅^{わずか}なる米^{こめ}を盗^{ぬす}むものにあらず。盗^{ぬす}れたりといふ證據^{せうこ}あらバとく出^{いだ}し給^{たま}へ。とく出^{いだ}し給^{たま}へと叫^{さけ}びつゝ。願^{ねが}もかゝるべき勢^{いきほひ}なり。みなくこの形勢^{けいせい}を見てからくとうち笑^{わら}ひ。所詮^{しよせん}論^{ろん}ハ無益^{むやく}也。すべて高野^{こうや}へ詣^{まう}ずるもの。邪^{よこしま}をなすか。又これを冤^{しへたげ}んとするものハ。忽^{たちまち}地^{だい}大師^{だいし}の冥罰^{みやうばつ}を蒙^{かう}」⁴



るといひ傳^{つた}へたり。この飯^{いひ}を炊^{かし}たる鍋^{なべ}をもて來^き給^{たま}へ。おのく祈^き念^{ねん}して件^{くだん}の鍋^{なべ}を被^かり。黒白^{こくびやく}を試^{ため}すべし。もし吾^{われ}儕^しが御身^{おんみ}を冤^{しへたぐる}ならバ。立^{たち}地に罰^{ばつ}を蒙^{かう}り。又御身^{おんみ}が偽^{いつは}るならバ。驗^{しるし}なき事あるべからず。とくくといそがしたつれば。紅皿^{べにざら}ハ愁^{なまじ}にあらがひて。已^{やむ}ことを得^えず。彼^{かの}鍋^{なべ}をもて來^きるを。道者^{どうしや}ハおのく塵^{ちり}手^て水^{みづ}して。高野^{こうや}山^{さん}の方^{かた}を遙^{やう}拜^{はい}し。ひとりく鍋^{なべ}をかぶりけれども。させる驗^{しるし}も見えず。さらバあるじの女房^{にようぼう}かぶり給^{たま}へとすゝむるに推辭^{いなき}がたく。紅皿^{べにざら}も鍋^{なべ}をとつてかぶるとやがて。ひと頭^{かしら}に鑄^いてつきて。とりおろさんとする

に放^{はな}れず。こはいかにと驚^{おどろ}き悲^{かな}み。やよ道^{どう}」者^{じや}たち。はやく大師^{だいし}に勸解^{わび}奉^{たてまつ}りて。助^{たすけ}給^{たま}へと叫^{さけ}びしかバ。みなく或^{あるひ}ハおそれみ。或^{あるひ}ハ憐^{あはれ}み。鍋^{なべ}の蔓^{つる}へ手^てをかけて。引放^{ひきはな}さんとするに。項^{かた}のみ只^{ただ}長^{なが}くなりて。とみに放^{はな}るべうもあらざれば。今^{いま}さらに呆^{あき}れ果^{はて}。されバこそこの婦^{をんな}。米^{こめ}を盗^{ぬす}る冥罰^{みやうばつ}を蒙^{かう}りたれ。われく高野^{こうや}へ参^{まゐ}りなバ。よきに申^{まを}て得^えさすべし。汝^{ななぢ}も又^{また}懺悔^{ざんげ}して。三十三^{さんじゅうさん}度^ど彼^{かの}御山^{みやま}へ参^{まゐ}るべしといふ大願^{だいがん}を發^{おこ}し。信心^{しんく}懈^{ゆる}ることなくバ。鍋^{なべ}も安^{やす}らかに放^{はな}れなん。あら笑^{わら}止^とやと散動^{さんどう}て。おのくこゝをた

ち出たり。さる程に紅皿ハ鉄平が帰らざる隙に。彼鍋を打放さんと思ひて。鉈をもて搞などすれども。たえて缺ず。強て打バ皮肉痛みて堪がたく。寔にすべきやうもあらねバ。今更に淺ましく。人に見られん事を恥て。破たる衣をうちかぶり。柱にもたれて居たりける。さてまた鉄平ハ。津國乳守に到りて。紅皿が身賣の事を相語。かの婦にハまづあらはにしらせざる趣を示あはし。妓院の主人を伴ひつゝ。往來三十里の道を次の日の夕ぐれに立かへり。と見れば紅皿ハ物を被ぎて。荳屏風の蔭に蹲踞れるを。いと怪みながらしばし呼かけ。さるかたより客人あり。とく出たまへといふに。應もせず。鉄平大に焦燥て。今伴ひまゐらせ。たるハ。御身が給事の事をせわし給ふ人なり。はやく立出て。もろともにたのみ聞えんとハせで。などやかく尻のおもたきといきまけバ。紅皿荅て。われハきのふより頭痛て堪がたし。御身よきに待してかへし給へといはせもあへず。鉄平声をふり立て。縦頭痛のすれバとて。その人にあはれざる程の事ハあるべからず。とく／＼と呼びたつれば。紅皿とかく迷惑して。今且く待給へ。少し愈なバ見えんといふ。この時鉄平ハ。妓院のあるじを招き入れ。只今女子を見せ候べきが。あやにくに頭の痛と申なり。まづ放やかに坐し給へと聞えつゝ。棚の隅なる桶の中」に。米のあるを見て密に飲ひ。又紅皿に對ひて。客人も長途を來給へバ空腹なるべし。われも又物ほしき折也。鍋はいづかたにある。この米を炊て夜餐まゐらせなんといへバ。紅皿いよく迷惑して。鍋の事ハわれしらず。御身みづからたづね給へといふ。鉄平ハその故を曉らねバ。ふかく不審み。御身留主してありながら。只一ツの鍋のゆくへを。しらずといふことやある。はやく置たる処をしらせ給へ。やよく／＼としてしばし問れ。紅皿今ハ荅んやうもなく。おし黙て居たりしが。且くしていふやう。御身よく物を思ひ給へ。家に一緡の錢も残しおかずして。き」のふも帰り給はねど。今にもあれ立かへり給はん。一塊の飯粒もなくハと思ひて。鍋を賣て米を買おきたりと欺けバ。鉄平大に呆れ果。この愚者更に道理をしらず。米を買たりしも鍋なくハ。何をもつて炊ん。寶も坐するに。飽までわれに恥見せける。憎さよと罵つゝ。壁に掛たる摺小木を引とつて。紅皿が百會のあたりを。ちからに任せて丁とてば。ぐわんと響きて反かへす。これを見る妓院のあるじも。もろともに怪みて。江口の君の故事ならで。この婦ハ金仏の再來にてや在すらん。又生れ得て恥をしらぬ。鉄固皮にやあるらんとて。衣の隙をさし覗けバ。鉄平ふたゝび摺小木を。閃して礫とうつ。打バうつほど紅皿が。頭ハ頻に鳴わたり。施餓鬼の寺に破鑼の音するがごとくなれば。婦も今

ハたまりかね。迷んとすれば鉄平が又跳かゝるを妓院のあるじ。こハ短慮也とて抱き出。三人押あふ伏屋の中。執掌るまゝに紅皿ハ。圍爐裡へ足を踏こみて。挫と輒バ古拾のふはりと脱て頂に。すつぽりかぶりしあし鍋ハ。なべて呆れぬものもなく。息を筑摩の祭ならずハ。鏝とられし落武者の。途をうしなふに異ならず。縁故をしられバ。鉄平ますく腹たちて。戯も事にこそよれ。その鍋遅せと焦燥つゝ。蔓に手をかけとらんとすれバ。紅皿もろとも引よせられ。頭痛(む)と叫ぶを言はず。もぎ放さんと引にけり。されど首ハ拔るとも。弥勒の世までこの鍋の放るべうもあらざれバ。鉄平いよく疑ひ迷ひ。大息つきて故を問ふに。紅皿今ハ匿がたく。高野道者に宿かして。米を盗みし大師の冥罰にや。一たび被ぎたる鍋のはなれざる本末を物がたれば。鉄平うち驚き。乳守の人に聞するも。面目なげに見えにけり。妓院のあるじもこの形容を見聞して。掌を丁とうち。惜べしく。年紀のわかくて容止の艶麗なるを見てハ。身價百金ハ輒く出すべきものを。玉に瑕鏡に錯。鍋を作り著たれバ。絶て「物の用にたゞず。はるぐの路を伴れて。畢竟路銀を費せしと。呟きく帰りければ。鉄平ハ較計ちがひて。頻に憤れどもすべきやうなく。いたく罵りてつと出んとするを。紅皿忙しく引とめ。こハいづ地へとて行給ふ。今伴ひ給ひし人の言葉にて。御身がわれをたばかりて。妓院へ賣。身の落着をなさんとし給ふ事ハよくしりぬ。しかるに思ひもかけずかゝる姿となりしを見て。いよく疎み。おき去にして奔らんとすとも。やハ放さじと責縁を。鉄平撲地と突倒し。そハいふまでもなし。神仏にも見すてられて。生れも得つかぬ廃人となりたる婦を。養て何かせん。われハわが身の安穩を。はからんと思へバ。いといそがし。そ。こ退べしとて踏にじり。走り出る足首を。楚と捉て引戻せバ。頷蹴かへし後をも見す。驀直に出去るを。紅皿ハなほ遣らじとて。轉つ輒つ追ひ來り。喃情なの男しばしまて。契りし昵言ハ偽り欺。われを捨てゆかんとならバ。大澤にて人を殺せし一件の事を訴て。からきめ見すべしと叫ぶにぞ。鉄平奮然として走りかへり。この婦を活おきてハ。わが為よからじと思ひしかバ。紅皿が襟上颯て。野中の古井に挫と投入れ。大なる石を引起して。三ツ四ツ打こみ。井の中をとくと見て。からくと打笑ひ。膝のあたりの砂かきはらひ。いづ地ともなく立去りけり。嗚呼因果勳直」(挿絵第六回)の理。誰かハ終に脱れ得ん。むかし紅皿が母なりける落穂ハ。嫉妬によつて本妻晩稲を菩提処の井に沈めつる報にて。その身畜生の子を孕て。非命に死し。今亦女兒紅皿も野中の井に沈らる。夫缺皿が忠考の善報ハ。皿を碎くといへども成敗の



井を脱れ。紅皿が奸悪の冥罰ハ。鍋を被りて情人の為に井に殺さる。井によりて善悪をしる事。こゝに至りて三たびなり。巻を開(ら)くのはらはべたち。汲見て自の戒にせよかし。

第九 熊野路の露

缺皿勇藏ハ。貯に事ハ虧ねど順礼の行者に打扮。普く霊場を」¹¹めぐりて。源七が往方をしらん為。西國三十餘ヶ処の寺々を遍歴して。次の年の春。ふたゝび紀路へ出たるに。廣岡兵衛が舊の奴隸何がし。故郷へ赴くにゆき

あひ。はじめて佐用丸の事。兵衛が枉死。卯三三が義心。紅皿鉄平が事。小船が卯三三團吉とゝもに。夫の仇人を索に出たる事まで。審に聞しりて大に驚き。いかにもして小船に環會。もろともに仇人鉄平を討とらんとて。ますゝ神仏に祈願せり。かゝれば缺皿ハ。妹紅皿がよからぬ所行をなせしより。事のこゝに及べるをふかくうち歎きけるとぞ。この時久米鉄平ハ。紅皿を井に沈て。名手の里を立退。熊野の山家を徘徊して。回國の行者に打扮。人の門に立て半碗の飯を乞。往來の人にっきて一錢を徴。野に臥木蔭に宿りて日をおくりぬ。しかるに彼此人のかたり傳るを聞バ。このごろ鍋を被りし婦。高野山へ三十三度参りするが。既に満願せしといふ。こハもし紅皿が亡魂などにやと思ふに。ますゝ怪しければ。やがて彼山へ赴んとするに。その夕紅皿にゆきあふたり。互にこはいかにと驚きて。しばしが程ハよりもつかず。紅皿ハ鉄平をいたく恨罵り。もし伴じとならバ。われもすべきやうありとて泣叫べば鉄平。殆もてあまし。さていかにして命助かりしと問に。紅皿荅て。彼井戸にハ水なくて。おのづから拔道あり。故」¹²に其処より跋出て。高野山へ三十三度参りし。大師に勧解奉るといへども。聾ほどもきかずして。鍋ハいまだ放れず。亦那智の御寺へ詣んと思

ひて。こゝに來たりしといふ。鉄平縁由を聞て大に慚愧し。彼が命つよきに呆れて。ふたゝび殺すにしのびず。ぜひなくこれを伴ひけり。さても錦織卯三二ハ。團吉とゝもに小船を扶掖き。南海道を經歷して。高野山に兵衛が白骨をおさめ。それより熊野権現へ参らんとて。三人もろともに。羊腸たる山ふところの細道をわけ來れバ。いと怪しげなる乞丐女。笠をふかくして。道の次に立在めり。その頭いとおもげなれバ。こハ近曾人の噂する。鍋かぶりの女なら」んとて。ちかくなるまゝによく見れバ。彼鍋かぶりハ紅皿也。すハよきものに逢ぬ。これを捕て責問バ。鉄平が在処もしれざる事ハあらじとて。つと走りより。めづらしや紅皿。卯三二を見忘れたるかと呼はりつゝ。既に引捕んとすれバ。紅皿阿呀と驚き怕れ。後をも見ずして逃走るを。卯三二ハなほ遑さじと追蒐たり。鉄平ハ少し後れて。おなじ路を來る折しも。卯三二と名告る声を聞て。忙しく笈をおろし。木蔭に身を潜めて待ともしらず。卯三二ハ追こと二町許にして。忽地紅皿を見うしなひ。そこかこゝかとして見かへる処に。思ひもかけず。一叢繁き小松が下より。閃來る手裏劍に。吭を打めかれ。刀」¹³ 尖白く項に出。撲たと倒れて死にたりける。小船團吉ハ。卯三二が後につきて。もろともに追來りしが。この景迹を見て大に驚きさてハ仇人ハこのほとりに躲れ居るとおぼゆるぞ。とく撈出せとて。雨衣を盾とし。主従小松をかきわけゝ。わけ入る後に大男。忽然と立あらはれ。こやゝと叫ぶるを。主従見かへりて。ずかゝと左右より詰すれバ。彼大男ハ小松を押撓て尻をかけ。小船主従をじろゝと見やりつゝ。汝等何ものなれバ。卯三二が方人するぞ。われ遺恨あるによつて。和州大澤にて討果すべかりしを。人違して旅人を切害し。けふまでハ助おきぬ。汝等命惜くハはやくゆけ。狼狽て」後悔せそと嘲弄す。小船團吉ハそれと曉りて齒怒をなし。さてハ聞及し久米鉄平にてありけるよ。吾儕ハ大澤にて汝が為に撃れたる。播州山脇の郷士。廣岡兵衛が妻小船。奴隸團吉と呼るゝもの也。汝も原武士の真似せしと聞つるに。恩に報ずるに仇をもつてし。剩その人を。詭討にする卑去さよ。夫の仇主の仇義に仗ときハ卯三二殿の當の敵。古今に稀なる大悪人。いかでか天の羅を脱ん立あがつて勝負を決せよといきまきて。瑋くつろげ詰かくれバ。鉄平からゝと打わらひ。き聞てハ汝等も助がたし。みづからはやう逃ハせで。思はぬ殺生さするかな。いで死たくハ望の」¹⁴ ごとく。この世の暇をとらせんとて。笈の中にかくし持たる。太刀抜かざして跳かゝるを。團吉逆戰ふといへども。いかでか鉄平に敵すべき。隅ふかく切こまれ。朱に染て倒るゝを。小船入かはりて透間も

なく切てかゝるを。片手にて拂ひ除。乳の下四五寸切下れバ。噫と叫びて轉輾しが。刀を杖に身を起し。よろめきよろめく肩尖を。又一刀丁と切る。切られて肢體血に塗れ。遺恨の涙地を湿す。今般の苦痛に主従が。手足かなはねバ鉄平を。にらみつめて息を吻き。朽をしきかな。いひがひなくも。われさへ仇の刃にかゝり。遂にこの野の夕露と消ともしらで。鉄皿と勇藏ハ何」國にあるらん。夢になりともしらせたや。それともしらずハ誰か又。われにかはりて仇人を討ん。寔に神明佛陀にも。見はなされたる身の果かと。主従互に薄命を。欺くも息の下也けり。鉄平ハじろく。こなたを見やりあなたを見かへり。あなかしましきくり言。聞もうるさし。息の音とめんと立あがり。左右へ撲地と蹴かへして。足もて頭をしかと踏とめ。ぐさとつらぬく二刀。あはれはかなき取期なり。かくて鉄平ハ三人の懷中をかい探りて。路銀を悉く糞ひとり。手をあげて遙に招けバ。鉄皿は彼処の木蔭より走り來つ。點頭あふたる折しもあれ。ちかく聞ゆる」¹⁵



鉄皿も笠をふかくして。面をかくし。脱れ避んとおもへども。この処ハ荊棘ふかくして。只一條の細道なるを。避んとせバ怪られん。誘と憚る氣色もなく。そなたに向ひてあゆみけり。こゝに鉄皿勇藏ハ。那智へ詣んとて。この路をたどり來るに。深山鳥の頻鳴て。何となく胸うち騒げバ。後室小舟の事いと心もとなし。今ごろハいづ地をか歴めぐり給ふらんなどいひ出て。暮かゝる山辺をいそぎゆくむかひより。回國の修行者と笠ふかくしたる女道者と。つれたちて出来るに。路ほそやかなれば。しばし傍に。立在。互に撞木とりな」

〈挿絵第七図〉」¹⁶ ほして。むかへ回向の鉦の數。うちあはしつゝ。遣り過し。ゆくこといまだいく

ばくならず。と見れば松の下蔭に。三人いたく切られて死したるものあり。こハそもいかにと痛しみ。缺皿もろとも走りよるに。あな浅まし。殺されたるハ小船主従。今一人ハ認めねど。是なん近曾古傍輩の物がたりに聞及べる。錦織刃三三なるべしと。思へハ見ればおなじ日に。おなじ山路を来にけれど。今般にも得あはずして。やみく撃せし朽をしきよと。悔歎ハ。あなたにも。立とまりて紅皿がしバく指し密語を。こなたの二人は佶と見て。さてハ今ゆきあひし修行者ハ。正しく仇人といひも果ぬに。飛來る手」裏刃勇藏が柄杓にはつしと受とめたり。是ハと声をかけ皿があぶないことやゆふまぐれ。木がくれてはやく修行者の。姿ハ見えなかりにけり。

第十 忠孝の世榮

久米鉄平ハ。熊野路にて刃三三小船等を反撃にし。路銀夥集ひとりて。紅皿を伴ひ。丹波國何鹿郡。上林に來たりて劍法の指南をなし。久米氏なるよりおもひよせて。皿山鉄山と改名し。よろづはじめにハ似ず。衣食住の三ツ。その処を得たるが如し。こゝに亦通紅寂靈和尚とまうす。道高権智の聖」おはしけり。山陰道の内にて。大伽藍を建立せんと思ひ企給ふ事久しといへども。このころハ兵乱打つぎたる後なれば。合力すべき檀那もなく。隱岐石見出雲伯耆因幡但馬丹後。この七箇國を勸化し給ふ事數年にして。今茲又二三人の従弟を將て丹波に來り。若尾山光明寺に寄宿し給へり。こゝをもて遠近の道俗日々に詣て十念を受けるに。利益響の物に應ずるが如し。皿山鉄山ハこの事を傳聞て。つくぐとおもふやう。向に紅皿が。はからずも廃人となりたるとき。彼を伴ひて。世の胡慮とならんも朽をしけれバ。古井に推沈めて。全く殺」したりと思ひしに。それにてまなほ死なず。熊野まで追ひ來りて。いたくうらみ罵りしかバ。已ことを得ずこゝへハ俱したり。しかれども彼も恥て朝夕引こもり。たえて日影を見ることなく。われも又武藝の門人などにしられんかと影護て。心を苦むるのみ。時しもあれ今光明寺に名僧來りて。病厄を祈禱するに。應驗揭焉と聞ゆ。われ試に紅皿を將て彼処に赴き。加持を乞はよと思ひて。まづ紅皿に思ふ程をしらすれば。すなはち行べしといふ。さて詰朝紅皿を轎に乗せ。鉄山みづから付添て光明寺に到り。群集の老弱にうちまじりて且くま」つに。數聲の鐘高く響て。寂灵和尚二人の徒弟を従へ。屏風の後よりめぐり出て。鹿皮の柵を布設たる法坐の上に登り給ふ。その形容眉ハ白く髯ハ長く。仙骨飄然として寔に尋常にあ

らず。さる程に渴仰結縁の老弱。おのゝ次才によつてすゝみ出れば。和尚或ハ加持し或ハ十念を授給ふに。みな禮拜して退出づ。時に鉄山ハ。紅血に衣打被せたるまゝにて。伴ひ出。この婦人難病にあらず。汝夫婦積悪の報によつて。弘法大師の冥罰¹⁹を蒙りぬ。われ決して濟ことあたはず。しかれども懺悔にハ五逆十惡の犯人も。罪業頓滅せざるにあらず。一心發起して一事も覆ふことなく慨悔せば。来世の苦艱を脱れなん。いかにゝと問給へバ。鉄山大に迷惑し。この事のみハ許し給へとて逡巡す。和尚又宣く。愚なるかな。密計も四知を脱るゝ(三)となし。汝等いはずとも天地既にこれをしる。天地これをしるが故に。われ亦しれり。われまづこれをあかさなかと宣へバ。紅血おそれゝと跋よりて。聖の宣ふところ理なり。わらハ是を申べし。願くハ濟給へと申つゝ。なほ膝をすゝめ。その身美作にありしとき。」「異服の姉缺血を冤たる事。母の落穂が事。父源七が事晩稻が事。又わが身故郷を追放され。錦織卯三²⁰が庇を得。その妻世を去りて後。傍妻となり。鉄山が久米鉄平といひしとき密通せしに。その事發覺。鉄山潛に大澤にて卯三を撃んとして。過て旅人を殺せし事。又名手の里にありしとき。わが身高野道者の米を盜たる冥罰にや。被せられし鋼の今に放れざる事。その折しも鉄山に突落されて古井の中に陥し事。熊野路にて鉄山が小船卯三三團吉を反撃に。この丹波に來りて。劍術の指南する事」まで。首尾審に申ければ。鉄山ハ全身に汗を流し。當惑面にあらはれけり。その時和尚莞余として。善かな女人。この懺悔少しく罪業を減するに足れり。われ汝が心中を察するに。向に鉄山が為に古井に沈られたるをいたく恨めり。しかるに熊野路にて。鉄山が卯三二等を反撃にしたるの日。なほ同意して路銀さへ盜せたるハ。いかなる故ぞやと問給へバ。紅血荅て。宜ふ事にハあれど。わが身の苦さに人を怨み。おなじ道に引入れんとおもふが。煩惱のやるかたなきにて侍り。この身もし卯三二等が傍妻とならずハ。今の苦難ハせじとおもひし初一念ハ。鉄山をうらむるよりなほ甚しかりしといはせもあへず。こハ心も得ぬ卯三ハ汝が為に恩人ならずや汝等恩を忘れて不義の行をなさずハ。彼も殺さんとハ思ふべからず。しかれば彼に何の恨かあらん。いかにゝと宣へバ。紅血默然として回答なし時に和尚法坐をはなれてすゝみむかひ。

盤を碎て井を脱れ。鍋を載て便沈めり

黒白都て糸みづから浅深をおもへ

と高やかに説示し。珠数をもて衣の上より。りうくと」²¹ 打給へバ。紅皿が五體朝日に霜の解るがごとく。忽地見えずなりければ。鉄山うち驚きつゝ。遽しく被ぎし衣を引除るに。只一ツの鍋のみ残り。形ハ消てなかりけり。これを見るもの不可思議の法驗を感嘆し。一人の徒弟愀然として墨の衣を湿せり。暴悪無敵の鉄山も。身の毛いよたつばかりおそろしく覺けん。顔色土のごとくなるを。和尚見かへりて宣く。この女人汝が為に井に殺され。冤魂假に形を現じて。憑まつはりし事。最期の一念によるとはいへど正に佛の慈悲して。その因果を諸人に示し。後世の苦艱を「挿絵第八図」²²



脱れしめ給ふもの也。汝去らば速に去れ。長くこゝにあらバ禍あるべしと示し給ふにぞ。ますゝ驚き迷ひつる。周章で。寺の門を出去り。並松の下を走りゆくに。誰ともしらず打かくる手裏釦。馬手の袂へはつしとたち。松の幹へぞ縫とめける。鉄山駭然として引拔見れば。過つるころ熊野路にて。順礼に打かけたる。わが削刀にてありしかバ。ますゝ怪む折しもあれ。缺皿勇藏かひくしく打扮て。両方より引挟み。いかに皿山鉄山。汝久米鉄平たりしとき。大澤にて撃れ給ひし。廣岡兵衛恩顧の家隸。木村勇藏缺皿²³なり。

いぬるころ熊野路にて。後室小船。錦織卯三三等汝が為に反撃にせられ給ひし時。吾儕その処へゆきあはするといへども。事後れたるをもつて終に漏せり。今わが打かけたる手裏釦を見て。

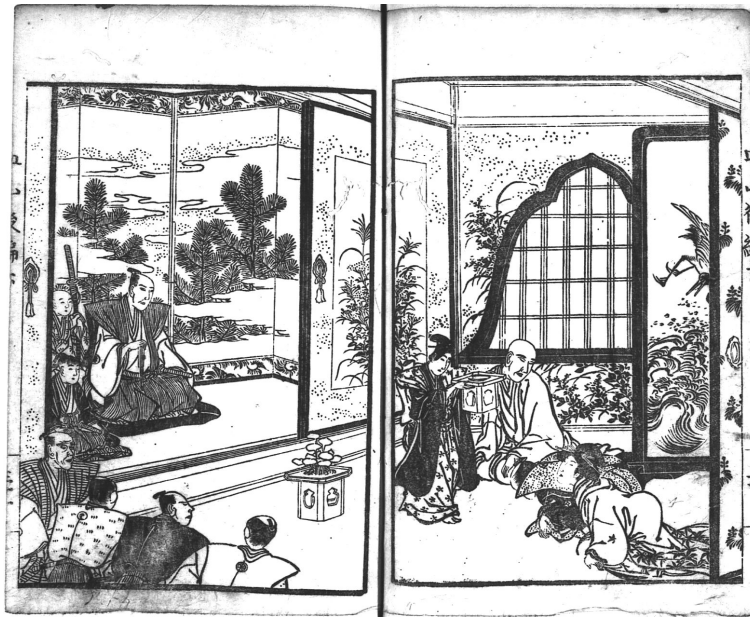
汝^{なんぢ}忽^{たちまち}地^{まち}恐怖^{おそ}の色^{いろ}をあらはす。但^{たゞ}速^{すみ}に打^{うち}殺^{ころ}さざるハ。その日^{ゆき}行^{いく}あひつる回^{くわいこく}國^{しゅきやうじや}の修^{しゆ}行^{ぎやう}者^{じや}ハ。汝^{なんぢ}なるべしと猜^{すい}しながら。なほ慥^{たしか}にしらんが為^{ため}也^{なり}。且^{かつ}缺^{かけ}皿^{ざん}が父^{ちち}源^{げん}七^{しち}ハ。錦^{にしき}織^{おり}氏^ぢに由^ゆ縁^{かり}あり。しかれバ汝^{なんぢ}ハ吾^{わが}黨^{どう}の為^{ため}に千^{せん}釣^{せん}の讐^{あだ}敵^{たき}なり。わが両^{りやう}人^{にん}はからずもきのふこの光^{くわう}明^{めい}寺^{みやうじ}へ参^{さん}詣^{けい}して。寂^{じやく}灵^{れい}和^わ尚^{おせう}に竭^{あつ}し奉^{たてまつ}りしに。和^{おせう}尚^{しやう}の徒^{とてい}弟^{てい}角^{かく}阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}ハ。勇^{ゆう}蔵^{ぞう}が叔^{しやく}父^ふ。缺^{かけ}皿^{ざん}が父^{ちち}なりける源^{げん}七^{しち}法師^{ほふし}にて。不^ふ意^いの對^{たい}面^{めん}望^{ぞう}を遂^{とげ}。わがうへ審^{つまびら}に物^{もの}がたり。只^{ただ}このうへハ主^{しゆ}家^かの仇^{あだ}を報^{はく}ん事^じをおもふこと頻^{しきり}なりき。その時^{とき}和^わ尚^{おせう}示^しして宣^{のたま}はく。明^{みやう}日^{じつ}仇^{かたき}人^{にん}皿^{めい}山^{さん}鉄^{てつ}山^{さん}紅^{かう}皿^{めい}を将^あてこゝに來^きたるべし。彼^{かの}紅^{かう}皿^{めい}ハ陽^{やう}人^{にん}にあらず。われ汝^{なんぢ}等^{どう}が忠^{ちゆう}義^ぎを感^{かん}ずるのあまり。彼^{かの}女^{にょ}人^{にん}を濟^{さい}度^どし。仇^{あだ}をも輒^{たやす}く撃^うせなん。汝^{なんぢ}等^{どう}その帰^{かへ}るを待^{まつ}て。本^{ほん}望^{ぼう}を遂^{とげ}よと宣^{のたま}ふをもつて。今^{けさ}朝^{あさ}よりこの寺^{てら}に來^{きた}り。紅^{かう}皿^{めい}が懺^{ざん}悔^げによつて汝^{なんぢ}が暴^{ぼう}惡^{あく}。悉^{ことごとく}これを聞^きり。今^{けさ}ハ翼^{つばさ}ありとも脱^{のが}るゝに道^{みち}なし。はやく雌^し雄^{ゆう}を決^{けつ}せよと呼^よべバ。鉄^{てつ}山^{さん}驚^{きやう}とせしが打^{うち}笑^{わら}ひ。小^こざかしき仇^{かたき}人^{にん}呼^よばゝり。」²⁴反^{かへり}撃^うぞ觀^{くわん}念^{ねん}せよと罵^{のの}りて。刀^{かたな}をすらりと拔^ぬはなせバ。缺^{かけ}皿^{ざん}勇^{ゆう}藏^{ぞう}左^さ右^{ぎゆう}より。刃^{やいば}を閃^{ひらめ}いて打^{うち}てかゝり。奮^{ふん}撃^{げき}突^つ戰^{せん}時^{とき}を移^{うつ}し。勝^{せう}負^ふもわかたざりけるが。忠^{ちゆう}義^ぎに凝^{こつ}たる二人^{ふたり}が勇^{ゆう}敢^{かん}。



神明^{しんめい}擁^{おう}護^ごの刀^{かたな}尖^{とが}を。あしらひかねて鉄^{てつ}山^{さん}が。受^うながしゝ。太^た刀^{ちゆう}すぢやうやく乱^{みだ}るゝ処^{ところ}を。得^えたりやおふと勇^{ゆう}藏^{ぞう}が。透^{すき}もあらせず踏^{ふみ}こみゝ。右^{みぎ}の肘^{かひな}を打^{うち}おとせバ。缺^{かけ}皿^{ざん}直^{ちゆう}につけ入^いりて。諸^{もろ}膝^{ひざ}難^{がた}て切^{きり}たふすを。勇^{ゆう}藏^{ぞう}やがて髻^{もとり}楓^{ふう}み。首^{くび}掻^か切^きて立^{たつ}たりける。折^{をり}しも下^げ向^{かう}の老^{らう}弱^{じやく}男^{なん}女^{にょ}。四^し方^{ほう}に立^{たち}こみ見^{けん}物^{ぶつ}し。嗚^あ呼^こと感^{かん}ずる声^{こゑ}。しづしが程^{ほど}ハ鳴^{なり}も止^やまず。かくて勇^{ゆう}藏^{ぞう}缺^{かけ}皿^{ざん}ハ。群^{ぐん}集^{しゆ}を」²⁵押^{おし}わけつゝ寺^{てら}内^{ない}に入^いれバ。門^{もん}番^{ばん}の男^{おとこ}扉^{ひら}を閉^{たて}て。見^{けん}物^{ぶつ}の人^{ひと}を遮^{さへ}り留^{とど}めたり。抑^{おさへ}勇^{ゆう}藏^{ぞう}缺^{かけ}皿^{ざん}がこの寺^{てら}へ詣^{まう}て。源^{げん}七^{しち}法師^{ほふし}に環^{めい}會^{かい}たる縁^{ゆかり}由^{よし}をたづぬ

るに。件の兩人熊野にて。小船卯三二等が反撃にせられし後に來かゝり。行ちがひたる修行者こそ。仇人ならめとて追蒐しが。遂にその往方を見うしなひて。遺恨やるかたなく。三人の屍をバ。ちかき山寺に葬り。それより山陰道に出て。丹波まで來たりし夜。夢の中に誰ともしらず告ていはく。汝等父にもあひ。仇をも撃んと思はゞ。火ハ凡にありて陰陽ならびゆく処に到るべし。と告ると見て夢ハ覺たり。二人此事を」相語て。つら／＼考るに。凡に火をおくときハ光の字也。又陰陽ならびゆくハ明の字なり。しかればこのほとりに光明寺などいふ寺あらんかとて人に問へバ。若尾山光明寺といふ精舎。しか／＼の処にあり。こゝに通紅寂灵和尚とまうす聖の寄宿し給ふなる。その利益灼然也とて。老弱日毎に群集すといふ。さてハ夢の告ハこの寺に詣よとの事なるべしとて。やがて彼処へ索ゆくに。和尚の徒弟角阿弥陀仏と呼ぶ。沙弥ハ。缺血が父源七なり。互にこはいかにとて。且よろこび且うち泣て。兩人法衣の袖に携り。年來あくがれて諸國を索めぐれる事より。すべて身にかゝづらひたる一件」の事を物がたるにぞ。角阿弥は名告あはじと思ひながら。彼等が孝心の切なるに躊躇して。あらけなくも走り躲れ得ず。師父寂灵和尚遙にこの景迹を見そなはして立出給ひ。いかに角阿弥。佛も元ハ凡夫なり。子にあふ事をふかくな恥そと宣へバ。角阿弥はつとかしこみて。不覺に落涙し。さてその身宇奈手の森にて如此／＼のあやしみを見て發心し。數年諸國を修行しつ。この春はじめて寂灵和尚に謁して。御才子となりし事。又わが法名を角阿弥陀仏と呼ぶ。事ハ。われ宇奈手の森にて得たりし麻の角を。頭陀袋に藏て久しくもてりける」を。和尚御覽じて。汝むかしこの疊を殺せしより。一族みな殃に係れり。もしこれを済度せざれば、汝も道を得がたく。子どもらも世に出ることなしと仰て。おほけなくも牝牡兩頭の疊の爲に。一七日の法支を執行し給ひ。剩 彼疊の角を経巻の軸となし給ひぬ。しかるにその夜兩頭の疊和尚の枕上に立てまうすやう。冤魂執着して夥の怨敵に殃せしも。今善智識の済度によつて。畜生道の苦艱を脱れ。走獸として人間に仇せし罪をしり。更に道德無量の慈雲を仰ぐ。感悅何かこれにしかん。されバこゝろばかりの報ひをなし奉るべう思へども。たえて」献ずべきものなし。但し宿願のごとく一箇寺を建立し給んにハ。よろしき施主を導まゐらすべしといひをはり。かき消すごとく失たる迹に。年才五ツか六ツばかりなる稚児。鹿の皮に裹れ。頭ばかりをさし出せるが。忽然として前にあり。和尚やがて皮を押ひらきて扶出したまふに。皮に裹れてより。夥の月日を経

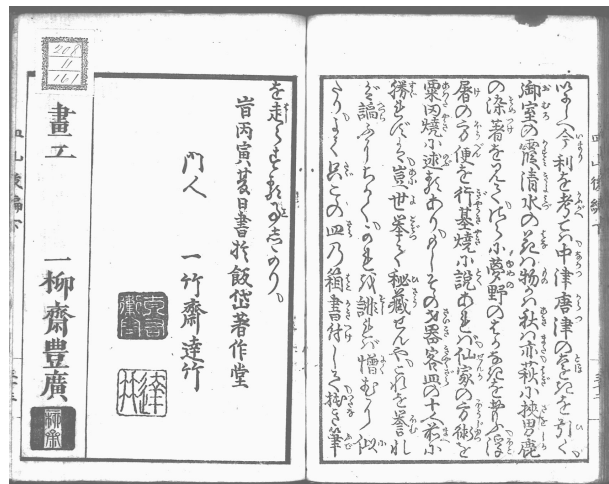
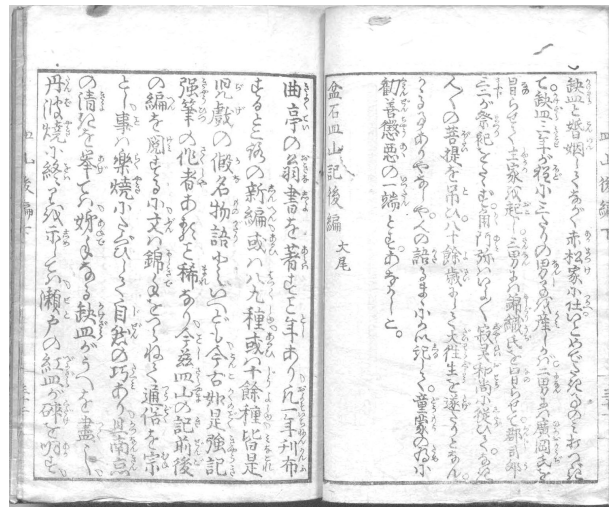
たりとハ見えながら。この子恙こづつなくて泣声なくこゑなどいとも高きぞ不思議しぎなる。和尚おせうつく／＼と見そなはして。これ平人たうとの子にあらず。伽藍がらんを建立こんりうすべき施主せしゅならんとて。ふかく勸いたはり。父の名なを問給とひへども。いふ事すべてさだかならず。時とき至いたらバおのづからしるゝ事あるべしとて。これを養やしなひ。彼かの蠻のりの皮かわをバ裯しね」²⁸として。今なほ法坐ほうざに布しかせ給ふと物がたるに。缺皿かけざら勇藏ゆうざう大に驚嘆きょうたんし。これ疑うたがふべうもあらぬ。赤松殿あかまつどのの嫡子ちやくし。佐用丸君さよまるきみなるべしとて。縁由このよしを演説みんせつすれバ。角阿弥かくあみ陀仏だぶつも。諸共もろどもに。不測ふそくの因縁いんえんを感じかず。且かつ晩稲おのしほ。卯三うさふじ。廣岡兵衛夫婦ひろおかひやうふうふが枉死わうしを悼いたみ。紅皿べにざらが不肖ふせうを嘆たんじ。缺皿かけざら三重みへ之介のすけ。勇藏ゆうざうが成長ひとなりて。その志こころざしの移うつらざるを稱賛せうさんして。墨すみの衣ころもの袖そでを絞しぼりぬ。その時寂灵和尚しやくれいおせう宣のたまく。角阿弥かくあみいたく歎なげく事なかれ。善ぜんに善報ぜんほうあり悪あくに悪報あくほうあり。頭身うつけみの世よに誰たれか脱のがれん。彼紅皿かのべにざらハ既に鉄山てつさんが為ために殺ころされたり。しかれども冤魂べんこん彼人に畜縁まつはりて。しか／＼の処ところにあり。明日あした件の兩人みょうにちにだんりやうにん。うちつれ立たち」てこの寺てらへ来るべし。しかれ共生死道ししようしみちを異ことにするが故ゆゑに。紅皿べにざらハ衣きぬをもてふかく面おもてを掩おほひ。その父ちちを見ることあたはず。角阿弥かくあみも又その声こゑを聞きて。その子こを見ることあたはず。且かならずしも哭泣こくきうすべからず。



われ汝等なんぢらが為ために紅皿べにざらを済度さいどせん。缺皿かけざら勇藏ゆうざうハこの折をりを窺うかがひて仇あだを撃うつべしと宣のたまひしが。果はたしてその言葉ことばのごとく。露つゆたがふことなかりける。さる程ほどに缺皿かけざら勇藏ゆうざうハ。輒たちく仇あだを撃うつとつて寺内じないに退しりぞき。鉄山てつさんの首くびを用もちて。兵衛夫婦ひやうふうふう。卯三うさふじ。團吉等だんきちらが灵れいを祭まつり。寂灵和尚しやくれいおせうに恩おんを謝しやして。佐用丸さよまるを乞受こひうけ。やがて播州べんしうへ立たちかへれバ。寂灵和尚しやくれいおせうも角阿弥陀佛かくあみだぶつをさしそえて。赤松殿あかまつどのに縁由このよしをいはせ」²⁹給ふ。かくて佐用丸さよまる恙つづなく帰着ききやくし給ひしかバ。國守義則夫婦こくしゆしのりふうふハ申すもさら也。家隸いのか老黨らうどう天てんに飲のび地に喜よろこび。勇藏缺皿ゆうざうかけざらが忠義ちうぎを感じかず。これ併しかながら寂灵しやくれい

和尚の賜なればとて。その法徳を謝せんが為に。義則すなはち狛野朝貞をもつて夥の錢財を寄進し。丹波に于一箇寺を建立し給へり。今の永澤寺是ならん歟。是によつて寂灵和尚ハ。年來の宿望を果し給ひ。又彼輩の為に禿倉を建、同國石川に鎮坐まします。春日明神の末社とし給ひけるとぞ。是より先勇藏ハ。小船に賜たる。仇討免許の御教書を義則へ返進し。姓名を木村三重之介勇藏と名告なり。〔挿絵第十圖〕³⁰ 缺皿と婚姻してながく赤松家に仕。いとめでたき事のみ打つゝきて。缺皿三年が程に三たりの男子を産しかバ。二男にハ廣岡氏を冒らせて主家を起し。三男にハ錦織氏を冒らせて。郡司卯三三が祭祀をたゝず。角阿弥ハいよく寂灵和尚に従ひて。なき人々の菩提を吊ひ。八十餘歳にして大往生を遂たりとなん。かゝる事ありやなしや。人の語るまゝにかい記して。童蒙の為に勸善懲惡の一端とす。あなかしこ。

盆石皿山記後編大尾 31



曲亭の翁書を著すこと年あり。凡一年刊布するところの新編、或ハ八九種、或ハ十餘種、みなこれにげ、かなものたり。皆是兒戲の假名物語といへども、今古如是強記強筆の作者あること稀なり。今茲皿山の記前後の編を閲するに。文ハ錦手をつらねて通俗を宗とし。事ハ樂焼にたぐひして自然の巧あり。且南京

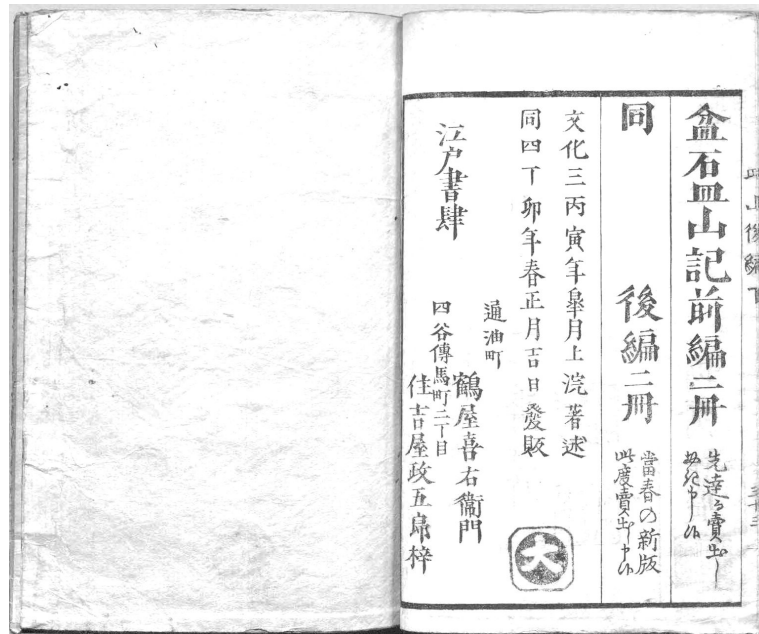
の清きを挙てハ、姉手なる缺皿がうへを盡し、丹波焼に終りを示してハ、瀬戸の紅皿が碎を明す、いにしへ今利を考てハ、中津唐津の遠きを引く、御室の霞清水の花ハ物かハ秋ハ亦、萩に挾男鹿の漆者を見て、さらに夢野のはかなきをおもふ、浮屠の方便を行基焼に説かれバ、仙家の方術を栗田焼に述るあり、もしその才器客皿の十人前に勝れずは、豈世挙て秘藏せんや、これを誉れば詔ふにちかく、かれを誹れバ憎むに似たり、よく只この皿の箱書付して、拙き筆」を走らす事しかり。

皆丙寅夏日書於飯代著作堂

門人 一竹齋達竹

「太右」「達」「衛門」「竹」

畫工 一柳齋豐廣 「一柳齋」



盆石皿山記前編二冊

先達而賣出し
おき申候

同 後編二冊

當春の新版
此度賣出し申候

文化三丙寅年皋月上浣著述

同四丁卯年春正月吉日發販

通油町

鶴屋喜右衛門

江戸書肆

四谷傳馬町二丁目

住吉屋政五郎梓

33

盆石皿山記前編二冊

先達而賣出し
おき申候

同 後編二冊

當春の新版
此度賣出し申候

文化三丙寅年皋月上浣著述

同四丁卯年春正月吉日發販

通油町

鶴屋喜右衛門

江戸書肆

四谷傳馬町二丁目

住吉屋政五郎梓